

孟德斯鳩著
何禮之重譯

萬法精理

第三冊
自卷六
至卷七

24086

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄 番號	第	號
社會科學門		
法律法學部		
種	款	項
目		次
全	18冊 / 內第	3冊
分類 番號	第	號
374.0		

校學範師岡福

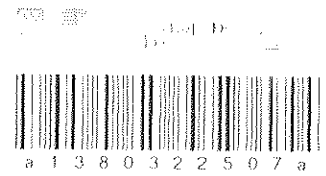
書

冊 / 內

T1A1

23

Ka11ba



福岡教育大学蔵書

孟德斯鳩著
何禮之重譯

萬法精理

明治九年
月刻成
何氏藏版

萬法精理第三冊

目次

卷之六 各政府其主義ノ相異ナル成績ハ民法刑法
ノ繁簡審判ノ法式刑罰ノ輕重ニ不同ヲ致
スヲ論ス

第一回 各政府ノ民法繁簡相同シカラサルヲ論
ス

第二回 各政府ノ刑法ニ繁簡ノ不全アルヲ論ス
第三回 何等ノ政府何等ノ景況ニ於テ法官ハ須
ラク法律ノ明文ニ據テ訟獄ヲ判斷スヘ
キ乎

第四回 斷案ヲ擬定スルノ方法

第五回 如何ナル政府ニ於テ君主自身ニ法官ト
爲リ得ヘキ乎

第六回 立君政ニ於テハ執政官ヲシテ法官タラ
シム可ラサル事

第七回 獨裁宰官ヲ論ス

第八回 政体相異ナルニ從テ訴告法ニ不同アル
ヲ論ス

第九回 政体相異ナルニ從テ刑辟ニ嚴寬アルヲ
論ス

第十回 佛國ノ舊法ヲ論ス

第十一回 人民有德ナレハ刑措ノ治致スヘキ事

第十二回 刑辟ノ作用ヲ論ス

第十三回 日本ノ法律ノ完全ナラサルヲ論ス

第十四回 羅馬元老院ノ精神ヲ論ス

第十五回 羅馬法律ノ刑辟ニ係ルモノヲ論ス

第十六回 罰ト罪トノ權衡其平ヲ得ヘキヲ論ス

第十七回 拷訊ヲ論ス

第十八回 錢刑膚刑ヲ論ス

第十九回 報復ノ法ヲ論ス

第二十回 父ヲシテ子ノ罪ニ連坐セシムルヲ論
ス

第廿一回 君主ノ仁恤ヲ論ス

卷之七 政府ノ主義相異ナルニ從テ節儉律、奢侈及

女子ノ分限ニ不同ヲ致スヲ論ス

第一回 奢侈

第二回 民主政ノ節儉律ヲ論ス

第三回 貴族政ノ節儉律ヲ論ス

第四回 立君政ノ節儉律ヲ論ス

第五回 如何ナル時宜ニ於テ節儉律ハ立君政ニ

要用ナルヤヲ論ス

第六回 支那ノ奢侈ヲ論ス

第七回 支那ニ奢侈ヨリ生スル所ノ禍害ヲ論ス

第八回 女子ノ節操ヲ論ス

第九回 政体異ナレハ女子ノ分限亦全シカラサルヲ論ス

第十回 羅馬人ニ家内裁判法アリシヲ論ス

第十一回 羅馬ノ制度其政体ト俱ニ變革セシ景況ヲ論ス

第十二回 羅馬人ノ女子主管者ノ法ヲ論ス

第十三回 女子ノ失操ヲ罰センカ爲メ諸帝制定ノ功令ヲ論ス

第十四回 羅馬人ノ節儉律ヲ論ス

第十五回 政体相異ナルニ從テ女子ノ嫁資及其

結婚ニ由リテ得ヘキ利分ニ不全アル

ヲ論ス

第十六回 サムナイト人ノ美俗ヲ論ス

第十七回 女主ノ治國ヲ論ス

各政府其主義ノ相異ナル成果ハ民法刑法ノ繁簡
審判ノ法式、刑罰ノ輕重ニ不同ヲ致スヲ論ス

第一回 各政府ノ民法繁簡相同シカラサルヲ
ヲ論ス

立君國ニ於テハ專制政ニ於ルカ如ク法律簡易ナル能
ハス蓋シ立君政ニ在テハ司法ノ院曹ナカル可ラス既
ニ法院アレハ裁判ノ斷案ヲ與ヘサルヘカラス其斷案
ハ之ヲ保存シ之ヲ學習シテ今日判斷スル處ノ案件ハ

昨日判斷セシ處ノモノト畫一ニ出サル可ラス且人民ノ性命資産ハ之ヲ保護シテ其鞏固ナルヲ猶ホ國憲ノ確立シテ動カサルカ如クナラシメサル可ラサレハナリ

立君政ノ司法官ハ人民ノ性命資産ニ屬スル案件ヨリ一身ノ毀譽榮辱ニ係ルモノニ至ルマテ理非曲直ヲ審決判定センカ爲メニ詳細慎密ニ其事情ヲ推鞠セサル可ラス法官ノ職ハ日ニ人民ノ信任ヲ増シ且ツ其判定スル關係漸ク重要ヲ致スニ從テ益精微ヲ加フルモノトス

然ルヲ以テ立君國ノ法律ニハ許多ノ規則アリ許多ノ

制限アリテソノ區域ハ極メテ廣大ナルヲ看出スルモ更ニ怪シムニ足ラス唯此規制アルニ依テ事件ノ部分ヲ細別シ論理ノ一事自ラ一科專門ノ技術トナルナリ立君政ニ於テハ身分上ニ品階ト云ヒ門地ト云フ一定ノ差別アルヨリ其資産ノ性質ニ又差別ヲ生スルヲ往々之アリ加之此政体特有ノ憲典ニ関涉スル法律アリテ更ニ此差別ヲシテ愈繁愈密ナラシムルナリ○是故ニ我國ニ於テハ物件ヲ區別シテ不動産リール、エ買件プルチ嫁資リドウエ粧奩ルナリフエ父方ナパトル及ヒ母方マトルノ産業エステ各種ノ動産フ、ホール、カインド、オ、真ナールノ産業エステ各種ノ動産フ、ホール、カインド、オ、真有地ムプル、シ假有地イルテ紹續ンデセト或ハ讓受ノ所有

コンフビ 有期 アルロ 有役ノ借地 ソクケ 地租 レン 或ハ
イヤンス デヤル

年利 デインヌヒ 等ノ數種ト爲シ各其規則アリ授受ノ際
必ス其規則ニ遵從セサル可ラス立君政ニ於テ法律ノ
簡易ヲ欲スルモ其勢能ハサルモノナリ

我政体ニ於テハ藉田ノ法ヲ施行シ其土地ハ皆ナ世襲
ノ資産トナス然ラサレハ采邑ヲ領スルモノヲシテ常
ニ君主ニ勤仕セシムルヲ能ハス是レ貴族ニ世襲ノ資
産ヲ賜與スルノ實ニ已ムヲ得サル所ナリ已ニ采邑ノ
制アレハ從テ許多ノ變則ヲ生スルヲ免レス譬ヘハ某
國ニ於テハ一采邑ヲ兄弟ノ間ニ分割ス可ラサルモノ
アリ或ハ季弟ノ得令ヲシテ諸兄ヨリモ多キニ居シム

ルアリ其例一ナラス

立憲國ノ君主ハ國內各州ノ事情ヲ通知ス故ニ各州ニ
各別ノ法律ヲ制定シ或ハ各別ノ習俗アルヲ容認ス專
制政ノ君主ハ之ニ反スルカ故ニ必ス畫一ノ法度ヲ設
立シ嚴酷不撓ノ志意ヲ以テ之ヲ施行シ君主ノ志意ハ
國中ヲ通シテ一樣ノ効果ヲ生シテ百事意ノ如クナラサ
ルハナシ

立君政ニ於テハ法院ノ斷案層々累加スルヨリ動モス
レハ全一ノ法律ニテ彼此相矛盾スルヲ無キヲ保シ難
シ是レ一ハ昔日ノ法官ノ意見考案ハ今日ト其趣ヲ異
ニスルニ由リ一ハ同一ノ事件ニシテ彼ニ在テハ訴答

ノ辨解其宜ヲ得シモ此ニ在テハ其宜シキヲ得サルニ由ル詳言スレハ人作ノ規則ニハ無數ノ獎習ヲ生スルヲ免レス章程煩苛竟ニ寛和政ノ精神ニ悖戾スルニ至ルヲ以テ制法者ハ始終之ヲ矯正ニ拮据スト雖モ掃除ノ功ヲ奏シ能ハス是故ニ若シ全ク無訟ノ治化ヲ致シ能ハス人民ヲシテ公義ノ伸暢ヲ法院ニ求メサルヲ得サルヲアルハ必ス憲法ノ典例ニ由テ然ラシム可シ斷案矛盾シ或ハ法律一定セサルニ由テ茲ニ致ラシム可ラス

人民ノ品階ヲ別タサル可ラサル政体ニ於テハ品階ニ應シテ特權殊典ナカルヘカラス既ニ特權殊典アレハ

亦タ其法律ヲ繁縟ニシ百千ノ節目ヲ立サルヲ得ス諸特權ノ中ニテ之ヲ賜與スル人ノ爲ノ又ハ一社會ノ人民ノ爲ノニ取モ便宜ヲ覺フハ其ノ告訴スヘキ法院ヲ制限セス當人ノ所望ニ任セテ彼此ヲ相選ハシムルニ在リ然レモ兩造ニ於テ那ノ法院ニ向テ告訴スヘキヤ其論一決セサル事アリ之ヲ又一難事トス

專制國ノ人民ハ情形全ク相反ス抑モ此政府ニ在テハ制法者ノ得テ制定スヘキ法律アルヲ見ス又宰官ノ依テ判決ス可キ案件アルヲ見ス全國ノ土地ハ舉テ君主ノ所有ニ歸スルヲ以テ不動産ニ係ル民法ノ如キハ殆トアルヲ無ク君主ハ全國ノ産業ヲ紹續スルノ權利ア

ルカ故ニ承襲繼續ノ法律ナキモ亦怪シムニ足ラス且
ツ或邦土ニ於テハ君主自ラ貿易ヲ經營シテ壟斷ノ利
ヲ專占スルカ故ニ貿易律モ更ニ無用ノモノナリ其ノ
人民ハ我カ養畜スル女奴ト婚姻ヲ結フヲ常トナスヲ
以テ女子所有ノ財産或ハ有夫女ノ利益ト爲ルヘキ民
法モ亦タ稀ニ見ル所ナリ斯ル邦土ニハ驚クヘキ多數
ノ僕妾アリ此輩ノ中ニ就テ能ク自己ノ志意ヲ立テ得
ルモノハ實ニ百中二三ヲ得難タシ自己ノ志意ニ於ル
尚才然リ況ヤ法官ノ前ニ於テ自ラ其行狀ヲ保任シ得
ヘキモノアルニ於テヲヤ其ノ道義カノ作用ハ其父其
夫又ハ主人ノ志意ニ任セテ自ラ之ヲ整理シ宰官ハ敢

テ干涉スルヲ無シ

專制國ニ於テハ名譽ノ果シテ何物ナルヲ識得スルモ
ノアラサルヨリ吾人カ寂モ貴重トスル所ノ名譽ノ點
ニ就テ更ニ紛紜ノ事ヲ生セス全ク之ヲ不問ニ付シ去
ルモノ、如シ是レ亦タ知ラサル可ラス夫レ專制ノ權
力ハ唯其本體ノミヲ以テ一境ヲ成シ体外ハ都テ無限
ノ空際ナリ（按專制政ハ各事各物皆ナ君主ノ權力ニ成
ス即チ專制ノ事ニテ外ニ法律道義等ヲ假用スルヲ要セ
足ナシト云フ義ナリ）故ニ遊客ノ該國ヲ游歴シタル
紀行ヲ讀ムト雖モ曾テ民法ノ事ヲ記セシモノヲ見サ
ルナリ（マゾリハツタンニ於テハ曾テ有文律法ノ類ア
ヲ調理ス○ウエダシ○按印度ノ古書等ノ習俗ニ從テテ
法ノ訓戒ヲ載スルノミニテ民法絶テ之アラサルナリ）

然ルヲ以テ該國ニテハ都テ訴訟ヲ起シ爭論ヲ生スヘキ機會アラス是レ人民ノ訴訟ニ從事スル者ハ粗暴ノ接遇ヲ蒙ムルト及ヒ法律ノ節目繁縟ナラサルヨリ其ノ告訴討求スル處一目ノ下忽チ理非ヲ看破セラレ更ニ刀筆ヲ弄シ文ヲ舞シ能ハサルヲ以テナリ

第二回 各政府ノ刑法ニ繁簡ノ不全アルヲ論

ス

世人常ニ謂ヘリ裁判ノ方法ハ宜シク土耳其ニ於ルカ如ク簡易單一ナラサル可ラスト果シテ此言ノ如クナラシノハ諸國民中ニテ極ノテ盲昧ナル人民^{土耳}其ヲ以テ人類ノ最モ知ラサル可ラサルノ要點^{法律}ニ於テ殊ニ

聰明叡智ナリト看做スニ在リ萬モ其理ナキヲ奈何セ

ン

夫レ資産ヲ回復センカ爲ノ或ハ受ケ得タル損害冤屈ヲ伸雪センカ爲ノニ訴訟ヲ起シ吾人カ經歷順序ヲ逐テ裁判上ノ章程ヲ推究スルハ其ノ冗多繁縟ニ堪ヘサルヲ看出スハ更ニ疑フ可ラス然レ氏顧テ其ノ章程ノ各人ノ自由及ヒ鞏固安寧ニ因縁スル所ニ就テ思考スルハ決シテ冗繁ヲ厭ハサルノミナラス却テ其ノ簡易ニ苦シムノ意思無キアラス吾人カ此裁判ヲ經歷スル際ニ嘗メ得タル煩勞、用費、延滞、乃至危懼ハ即チ各人ノ自由ヲ買ヒ求ムルノ價ナリト認定セサルヲ得サ

ルナリ

土耳其ニ於ルカ如ク絶テ人民ノ名譽、性命或ハ資産ニ
着意セサルハ都テ訴訟ヲ判斷スル極ノテ直捷快
速ニシテ苟モ原被ノ間ニ彼ヲ曲トシ此ヲ直トシテ速
了スルヲ以テ足レリトス敢テ其ノ章程、良否ヲ顧ミル
ヲ要セス故ニ土耳其法官ノ獄斷スルヤ片言ノ下一已
ノ喜怒ニ任セテ一方ノ者ヲ鞭笞シテ而シテ直ニ之ヲ決
定ス

斯ノ人民ニシテ健訟ノ性情アルハ之ヲ公義ノ伸達ヲ
強求シ銳意報復ヲ謀リ頑固移ラサルモノト認メサル
ヲ得サルカ故ニ人民ノ訴訟ヲ好ムハ政府ノ爲メニ甚

タ危険ナルモノトスレハ畏懼ヲ以テ國民ノ氣象ト爲
シ且瑣々タル紛擾ヨリ往々不虞ノ大亂ヲ釀成スハキ
ノ政府ニ在テハ此健訟ノ風ヲ防壓セシムハアル可ラ
ス○此治下ニ立ツ人民ニハ須ラク常ニ其姓名ヲ宰官
ニ知ラル、ヲナク而モ一身ノ安全ハ有テ無キカ如キ
卑屈ノ状態ニ在ルヲ識得セシム可キナリ

然レモ政体寛和ニシテ至賤ナル臣民ノ性命ト雖モ之
ヲ貴重愛惜スル所ニ於テハ叮嚀反覆シテ審訊査問ノ
順序ヲ經過スル以上ニアラサルヨリハ其ノ名譽或ハ資
産ヲ剥奪スルヲ無シ其性命ヲ奪フニ至テモ先ツ國家
民人ニテ彈劾ヲ加フル後ニアラサレハ敢テ之ヲ執行

スルヲ得ス國家民人ニ於テ之ヲ彈劾スルニ方テモ本
人ヲシテ十分ニ答辯回護ヲ爲スヘキノ餘地ヲ得セシ
ム可シ

一人 羅馬ノ覇王該撒及ヒ英國ノ王室 掘起シテ無限ノ
權柄ヲ掌握スルニ方テハ法律ヲ減縮シテ劃一ニ歸セ
シメント欲スノ一念必ス胃中ニ浮動スヘシ斯ク成立
スル政府ノ法律ハ臣民ノ自由權ニ関涉スルヨリモ全
ク一時ノ不便利ニ関涉スルモノ居多ニシテ臣民ノ自
由權ノ如キニ至テハ之ヲ熟慮審考スルノ暇ナシ
共和政ニ許多ノ章程ヲ必要トスルヤ敢テ立君政ニ讓
ラサルハ論ヲ俟タスシテ明白ナリ此兩政府ニ於テハ

臣民ノ名譽、資産、自由權及性命ノ位價愈貴重ナルニ從
テ法律ノ節目愈増加スルモノナリ

共和政ノ人民ハ都テ平等ノ地位ニ立モノナレ氏專制
政ニ於テモ亦タ平等ノ地位ニ立サルハ無シ但シ共和
政ニ在テハ事々物々一トシテ人民ニ屬セサルハナク
專制政ニ在テハ更ニ一事一物ノ人民ニ屬スルモノ無
シ

第三回

何等ノ政府何等ノ案件ニ於テ法官ハ
須ラク法律ノ明文ニ據テ訟獄ヲ判斷
スヘキ乎

政体益共和ニ近接スルニ從テ斷獄ノ規模亦益確定シ

テ動カス可ラス斯巴爾達ノ共和政ニ在テハ更ニイフ
オリ前ニ出ツノ爲ノニ標則トスヘキ法律アルヲナク擅
ニ訟獄ヲ裁斷セシハ一大失錯ト謂サルヲ得ス羅馬ニ
於テモ初メテ統領職ヲ置キシハニハイフオリニ異
ナラス一巳ノ意見ニ從テ斷案ヲ擬定シタレハ未タ幾
クナラスシテソノ不便不利ナルヲ知り終ニ一定ノ法
律ヲ設ケ其明文ニ遵ハサレハ能ハサルノ勢ヲ爲セリ
專制政ニ法律ナシ法官ノ執行スル所乃チ規則ト爲ル
立君政ハ否ラス法律ノアル在ルヲ以テ法官ハ一ニ之
ニ照準シ明文アルモノハ其明文ニ依テ斷案ヲ擬定シ
明文ナキモノハ勉メテ其精神ヲ推究ス共和政ニ至テ

ハ法官必ス法律ノ明文ニ恪遵セサルヲ得ス是レ人民
ノ名譽若シクハ資産若クハ性命ニ相關スルノ案件ア
ルニ方テ法律ノ解釋ニ由テ萬一人民ノ損害ヲ醸サン
ヲ恐レテナリ
羅馬ノ法官ハ此犯人ハ某罪ヲ犯セリ故ニ法律ノ明文
ニ照シ某科ヲ以テ之ヲ罰スト擬定スルニ過キス古法
ノ今日ニ存スルヲ見テ然ルヲ知ル可シ○英國ニハ陪
審官アリテ法官ヨリ囑咐スル訟獄ノ事實ヲ審考シ其
當否ヲ決定ス若シ陪審官之ヲ是ナリト決スレハ法官
ハ法律ニ照ラシテ相當ノ罰ヲ定ムルニ過キス唯タ其
眼目ヲ律文ニ注着スルニ在ルノミ

第四回 斷案ヲ擬定スルノ方法

故ニ斷案擬定ノ方法ニ差異ヲ生ス即チ立君政ノ法官ハ曲直ヲ裁判スルノ人ト爲リ同僚會議シテ一致ノ局ヲ結ハント欲シ各意見ヲ吐キテ商量シ他人ノ意見ニ合センカ爲ノニハ多少已レノ意見ヲ擲節シ若シ全條ノ中其ノ三分ノ二、已ニ一致スル時ハ少數ノモノハ意ヲ枉テ之ニ依從セサルヲ得ス共和政ニ至テハ此方法ヲ用難キ所アルヲ以テ羅馬及希臘ノ諸府ニ於テハ法官タル者嘗テ商量協議セシメテ各員ノ意見ニ從テ左ノ三條中ノ一ヲ陳述セリ曰ク予ハ之ヲ赦ス曰ク予ハ之ヲ罪ス曰ク其事ハ予ニ明白ニ知ラレトナリ是

レコノ兩國ノ如キハ共和ノ政体ニシテ人民ニテ躬ヲ裁判ノ事ヲ司トリ或ハ實際然ラサルモ人民ニテ裁判ヲ爲スヘキ權利ヲ有スルニ依テナリ然レモ人民皆ナ民法ニ通曉セルモノニアラス況ヤ訟獄ヲシテ變通取捨スル處アラシムルカ如キハ固ヨリ其智力ノ能ク及フ所ニアラサルカ故ニ法官ヨリ人民ニ吩咐スルニ一個ノ目的ヲ以テシ一件ノ事實ヲ以テシ之ヲシテ其ノ赦ス可キカ罰ス可キカ又ハ其裁判ヲ取消ス可キカヲ決定セシムルノミナリ

羅馬人ハ希臘ノ例典ニ則トリテ訟獄ノ裁判法ヲ制定シ各別ノ事件ハ必ス各別ノ訴訟法ヲ以テ管理スヘキ

ノ規則ヲ設立セリ是レ人民ヲシテ常ニ其事實ヲ曉知
セシメノ爭論ノ情由ヲ一定セシムルカ爲メニシテ已ム
ヲ得サルモノナリトス然ラサレハ訴訟ノ經歷スル間
時日ヲ曠フスル頗ル久シキニ彌リ其情由絶エス變換
シテ終ニハ彼此ノ分界ヲ定メ難キニ至レハナリ
是故ニ羅馬ノ法官ハ單ニ一件ノ訴訟ヲ受理シテ妄ニ
之ヲ増減出入シ或ハ制限スルヲ許容セサリキ○然レ
大宰官ハ訴訟法中ニ一個ノエキス、ボナ、フヒード
實ノ方法ヲ創制シ此法ニ依テ以テ斷案ノ擬定ヲ法
官ノ措置區處スルニ任セルモノ頗ル居多ナリ此法ハ
共和政ニ於ルヨリモ能ク立君政ノ精神ニ適應セリ佛

蘭西ノ佛國ニテ負債ノ爲メニ告訴セラルハ一方原告
ニ於テ負債ノ實額ヲ返償スルハ昔ヲ申述セサルハ
乃チ被告ヨリ訴訟ノ入費ヲ辨償セサルヲ得サルカ如
シニ於テ一切ノ訴訟ハエキス、ボナ、フヒードニアラサ
ルハ無シト

第五回 如何ナル政府ニ於テ君主自身ニ法官

ト爲リ得ヘキ乎

麥甲勿爾ハ佛校共和政ノ自由權ヲ失シタルヲ以テ國
家ニ對シテ反逆ヲ謀ルモノアルニ方テ羅馬ノ習俗ノ
如ク人民總体ニテ之ヲ裁判セサリシヲニ歸セリ其論
ニ曰ク佛校ニハ之ヲ糾問スルカ爲メニ八員ノ法官ヲ
置キタレ氏人員少ケレハ亦タ少キ人眞ニ籠絡サレテ

其志操ヲ變シ易シト實ニ間然スル處ナシ然レモ此ノ
國事犯ノ如キハ利害ノ係ル處民法ノ點ニ於ルヨリモ
政法ノ點ニ於ルモノ居多ナルヲ以テ須ラク其弊ヲ救
回スヘキ法律ヲ預定シテ以テ其民ノ安全ヲ保護セサ
ル可ラス何トナレハ人民ニテ人民ノ事件ヲ裁判スル
ハ乃チ是レ已レヲ以テ已レヲ治ルノ理ニシテ常ニ不
便ヲ生スルヲ免レサレハナリ

斯ニ見ル處アリテ羅馬ノ制法者ハ二法ヲ制定シテ此
弊ヲ防ケリ其一ハ彈劾ヲ蒙ムルモノニ未ク其罪ノ判
決ニ至ラサル前ニ其國ヲ退去スルヲ准許セリ其二ハ
犯人ノ財貨ヲ看テ侵ス可ラサルモノト爲シ以テ國民

ノ之ヲ藉没スルヲ禁止シタリ此外ニ人民ノ裁判權
ヲ制限スルノ法制アリ詳カニ第十一卷ニ論述ス可シ
梭倫ハ人民ノ刑事裁判權ヲ濫用スルノ弊ヲ矯救スル
方畧ヲ曉得セルモノト謂ッ可シ其法制ニ據レハアレ
オパグスノ法院アリテ人民ニテ擬定セル斷案ヲ覆審
シ果シテ若シ懲罰ス可キヲ赦免シ公義ノ當ヲ得スト
信スル時ハ再ヒ之ヲ人民ニ付シテ彈劾セシム若シ其
刑重キニ過キルハ直チニ其決行ヲ停メテ之ヲ再判
セシム此法ハソノ最モ尊敬スル宰官ヲシテ人民ヲ監
察セシメ更ニ又人民ヲシテ互ニ自ラ監察セシムルモ
ノニテ至善ナルモノナリ且斯ル案件アルニ方テハ故

ラニ規矩章程ヲ設爲シテ之カ決行ヲ緩慢ナラシムル
ヲ要ス就中罪人ヲ獄ニ繫クカ如キハ寂モ然ラサル可
ラス是レ人民ノ激發シル血氣ヲ鎮靜シ其冷淡ニ復
スルヲ俟テ公平ノ裁判ヲ爲サシメシカ爲ノナリ
專制政ノ君主ハ其身親ラ法官タルヲ得ヘシト雖モ立
憲政ニ於テハ然ルヲ得ス若シ立憲政ノ君主親ラ法官
タルハ國憲忽チ失墜シ而ノ中間ニ在テ上下ニ依ル
處ノ權柄渙散シ聽訟斷獄ノ定規停止シテ畏懼ノ心、人
民ノ心腔ニ充塞シ一人トシテ活潑ノ氣力アルモノナ
シ之ヲ要スルニ臣民ノ信任、名譽、愛敬、及、安全ノ程度益
增多スルニ從テ君主ノ威權益擴張スルモノナリ

此一事ニ就テ茲ニ又比喻ヲ舉テ以テ前文ノ理由ヲ演
述セントス夫レ立君政ニ於テ君主ハ即チ彈劾ノ一局
原告ト爲テ罪犯ヲ懲罰シ或ハ之ヲ赦免シ得ヘキヲ以テ
若シ君主親ラ法官ト爲テ訟庭ニ臨ミ之カ理非ヲ裁判
スル時ハ一身ニシテ原告ト爲リ又法官ト爲ルノ失体
アルヲ免レス

立君政ニハ往々財産沒收ノ法ヲ舉行シテ君主ソノ利
益ニ浴ス然ルニ若シ君主親ラ罪案ヲ判斷スルハ再
ヒ法官ト爲リ又原告ト爲ラサルヲ得ス

加之君主躬ラ法官ト爲ルハ君權中ニテ寧モ光榮ノ
盛ナル赦罪停刑ノ美德ヲ暴棄スルヲ免レサルヘシ

多ハ君主ノ教正ヲ諫ヌルモノニテ人民ヲ死罪ニ處シ
或ハ之ヲ追放シ或ハ之ヲ監禁スル處ノ法院ニ出テ之
ヲ裁判スルハ條理ノ當レ何トナレハ親ヲ法官ト爲リ
ルモノニアラスト論セリ
テ罪案ヲ裁決シ而ノ又君主ト爲リテ之ヲ赦免スレハ
一人ノ舉措彼此全ク牴牾シテ体裁ヲ成サス君主決シ
テ斯ノ如キ彼此背馳ノ行爲アルヲ悅ハサルヘシ殊ニ
審判ノ後ニ至テモ其犯人ハ無罪ニ決シテ放釋セラレ
シカ或ハ一タヒ有罪ニ決セシテ故ラニ赦免シタルカ
得テ知ルヘカラス徒ニ人民ノ意想ヲ惑亂セシムルノ
ミナリ

公爵ヲフハレットノ獄ニ佛王路易第十三世ハ親ラ訟
庭ニ臨テ判斷センヲ欲シ乃チ司法院ノ法官及議政

官數員ヲ内閣ニ召シテ可否ヲ商議セシノ且國王ノ特
旨ヲ以テ公爵ノ捕票ヲ發出セシニ就テ意見ヲ陳述
セシノタリド、ビリーウル（後法院ノ名稱）議長曰ク臣此獄ニ
於テ人君タルモノ、親ラ其臣民ノ罪ヲ判決スルヲ見
タリ實ニ咄々怪事ト謂ハサルヲ得ス夫レ人君ハ親ラ
赦免ヲ賜フノ美德ヲ有シテ刑罰ノ事ハ之ヲ官吏ニ委
任スヘキナリ今陛下ハ法院ニ坐シ躬ラ訟獄ヲ判決シ
テ臣民ノ幽冥界ニ放逐セラレテ再ヒ返ラサルモノヲ
目撃セントス抑モ人君ノ威儀タルヤ億兆ノ頼テ以テ
恩惠ノ源ト認ムル處ナリ何爲レソ以テ畏懼ヲ生セシ
ムヘキヤ唯タ人君、法廳ニ親臨セシノミヲ以テ將ニ法

教上ニ於テ誅責スヘキ陰罪ヲモ不問ニ付シ終ニ臣民
ヲシテ不平ノ心ヲ懷キテ人君ノ面前ヲ去ラシムルニ
至レリ○其獄已ニ決スルニ及テ議長再ヒ曰ク舊立ノ
例典ニ反シテ佛國ノ君王ハ自身ニ法官ノ職ヲ冒シ以
テ其士人ヲ死罪ニ處セリ臣ハ古來未曾有ノ獄ヲ見タ
リ
又君主親ラ訟獄ヲ判定スルハ僥幸ノ臣常ニ左右ニ
在テ懇願教唆ノ手段ヲ盡シ竟ニ其力能ク人君ヲ要シ
テ偏私ノ斷案ヲ與ヘシムルニ依リ非理不正ノ事常ニ
絶エス羅馬諸帝ノ治世ヲ通觀セサルヤ其ノ暴虐ノ政
流行シテ理非顛倒シ天下ノ人心ヲ驚駭セシハ皆ナ其

君狂愚ニシテ親ラ訟庭ニ臨ムニ由ラサルハ無シ
タシトス曰ククロデウス帝親ラ訟獄ヲ判斷シテ宰官ノ
職ヲ收攬シテ以來百事強奪抄畧ニ涉ラサルハ無シ子
口帝嗣立スルニ及テ勉メテ民心ヲ撫慰セント欲シ乃
チ敕旨ヲ下シテ曰ク予慎ンテ親ラ私事ノ訴訟ニ關係
セス親ラ裁判ヲ爲サル可シ又兩造ヲ宮禁ノ中ニ召
シテ嬖臣佞人ノ抑制毒手ニ苦シマシメサルヘシト
ゾシムス曰クアルカデス帝ノ治世ニハ讒言誣告ノ黨
群ヲ爲シテ四方ニ横行シ其毒焰竟ニ禁中ニ蔓延セリ
若シ戸主死去スル者アレハ直ニ之ヲ看テ子女ナキモ
ノト倣シ一片ノ詔書ヲ出シテ其資産ヲ沒收セリ蓋シ

帝ノ暗愚ハ駭クヘク而ノ皇后ハ悍黠非常ニシテ恒ニ
嬖臣内豎ノ貪心ニ籠絡セラレテ斯ノ暴政ヲ循致シ正
直ノ人ハ寧ロ一死ヲ抛ツノ却テ苦ヲ免ル、ニ若カス
ト思フニ至レリ

テロコピエス曰ク當初禁中ハ肅然トシテ曾テ小人群
ヲ爲スヲ見サリシカヂユスチニヤン帝ノ治世ニ迄テ
法官已ニ曲直ヲ判斷スルノ自由權ヲ失セシカ故ニ人
民皆テ法院ヲ去テ宮禁ニ控訴シ宮禁ハ乃チ訟獄ノ淵
藪ト爲リテ人民四方ヨリ蟻集シテ雜沓ヲ極ノタリ蓋
シ人民皆テ禁中ハ人民ノ裁判ヲ賣鬻スル而已ナラス
法律ノ寂モ嚴重ナルモノト雖モ之ヲ出入スル所タル

ヲ通知スルヲ以テナリ

法律ハ人君ノ眼目ナリ唯タ眼目アルニ頼テ人君ハ其
ノ看破シ能ハサルノ事物ヲ看破ス若シ人君一タヒ法
官ノ職ヲ執行スルキハ勵精シテ公義ノ道ヲ伸達スル
モ全ク小人ノ志ヲ成スニ過キスシテ人君ノ志ヲ達ス
ルヲ能ハス小人ノ志トハ何ソヤ人君ヲ欺罔スル是レ
ナリ

第六回 立君政ニ於テハ執政官ヲシテ法官タ

ラシム可カラサル事

立君政ニ於テ君主ノ輔弼ヲシテ裁判ヲ掌ラシムルハ
其害ノ大ナルハ君主親ラ之ヲ爲スニ於ルト敢テ軒輊

ナシ然ルニ茲ニ一國アリ財政ニ関渉セル訴訟ヲ裁決
セシモンカ爲ノニ數員ノ法官ヲ置キ而ノ又君主ノ輔
弼アリテ之ヲ裁判セント欲スルヲ目撃ス其事殆ト信
シ難キカ如シ此一事ニ就テハ議論紛生一ニシテ足ラ
サレバ唯タ其一端ヲ擧ケテ其余ヲ概斷セントス
夫レ内閣ノ議政官ト司法官トハ性質全ク相反シテ決
シテ混同ス可カラス議政官ハ人員ノ寡少ナランヲ要
シ司法官ハ其衆多ナランヲ要ス其故ハ議政官ノ機務
ヲ發行スルニ方テハ活潑ニシテ一時ノ氣焰ニ乗セサ
ル可ラス之ヲ得ルニハ四五員ノ大吏ニテ專ラ萬機擔
任セサレハ能ハス之ニ反シテ司法官ハ其心ヲ平虛淡

寧ニシテ百般ノ案件ニ於テ毫モ偏倚スル所ナキヲ要
スレハナリ

第七回 獨裁宰官ヲ論ス

專制政ニアラサルヨリハ獨裁宰官ノ類アルヲ得ス
羅馬史ヲ讀ムモノハ必ス獨裁宰官ノ其權ヲ濫用シテ
極點ニ至リシヲ知ル可シ彼ノアッピユス當時獨裁
專權宰官ノ如キハ已ニ自身ニ制定セル法律ヲ破毀セリ
故ニ其ノ法院ニ臨ムニ及テモ亦國法ヲ侮慢スルヲ無
カラント欲スト雖モ決シテ得ヘカラサルナリ李維（按）羅馬史ニ
デセムウ井ル（按）羅馬宰官ノ名ニシテア
行ヲ載セテ甚タ明詳ナリ曰クアッピユス曾テ或人ニ

賄囑シテ訟庭ニ於テウ井ルジニヤ女子ヲ其ノ女奴ナ

リト誓言セシメタルハウ井ルジニヤノ親戚ハアツビ

ユスノ制定セル法律ニ基キテ裁判ノ歸結スルマテ該

女ヲ保領セントテ陳述シタリアツピユス之ヲ聞テ此

法ハ唯タ其父タル者ノ爲メニ制定セシモノニシテ當

時其父ウ井ルジニユスハ他國ニ在ルヲ以テ此法ヲ此

案件ニ接用ス可ラスト批答シテ保領ノ事ヲ聽井ハリ

キ（按）ウ井ルジニヤハ羅馬ニテ美人ノ稱アリ其父ヲエ

ルアツビユスニ容色ニト戀慕シテ之ヲ強奪センコト欲シ

乃チ其人ニ賄囑シテ其奴隷ヲナリテ之ヲ誣告センコト

歸リ法院ニ出テ其冤枉ヲ訴ヘシカニ宰相官ト誣告者ト

表裏奸巧ノ爲メテ受理セサルニ於テ自ラ其女ヲ殺シ

終ニ其女ノ免ルヘカヲササルヲ察シテ自ラ其女ヲ殺シ

直ニ軍營ニ到テ宰相官ノ暴虐ヲ兵士ニ宣告シ兵ヲ擧テ

羅馬ニ入リアツビユスノ罪ヲ告發スルノ

羅馬ニテハ甲ノ國士ニテ乙ノ國士ノ罪ヲ告發スルノ

法律アリ蓋シ此國ハ共和ノ政体ナルヲ以テ國家ノ治

安ニ関涉スル事ニ就テハ國士タルモノハ彼此ノ別ナ

ク各無限ノ熱心ヲ以テ盡カセサルヲ得サルト一國ノ

公權ヲ擧テ國士ノ掌握ニ歸スル者ト看做サル可ラサ

ルノ主義ニ出テタリ然ルニ共和政一變シテ帝爵國タ

ルニ及テモ尚ホ共和政ノ精神ヲ固守シテ改メス其弊

第八回 政体相異ナルニ從テ訴告法相同シカ

ラサルヲ論ス

遂ニ惡徒群ヲ爲シテ蜂起シ皆ナ告發者ト爲リ此輩
皆ノ險兇ニシテ奸智ニ乏シカラス其心卑劣ニシテ名
利ノ爲ノニ志操ヲ易ルヲ厭ハス四方ニ奔走シテ他
人ノ罪ヲ釣索シ君主ノ意ニ迎合シテ之ヲ刑辟ニ陷レ
以テ已レノ名譽ヲ釣リ富財ヲ求ムルノ階梯ト爲セリ
幸ニシテ我國ノ如キハ未タ曾テ此弊アルヲ見ス
今日我國ノ法律ハ其制甚タ懿美ニシテ執法行政ノ大
權ハ國君ノ掌トル所ニ歸特ニ一員官吏ヲ命シテ各法
院ニ監臨セシメ罪惡ノモノアルハ此官吏乃チ國君
ノ名ヲ以テ之ヲ彈劾糾責ス此制アルカ爲メニ我國ニ
於テハ曾テ告發ノ事ヲ以テ業務トスルモノ無シ若シ

夫レ人民ノ冤枉ヲ伸達スルコノ官吏ニシテ其權ヲ濫
用スル等ノ嫌疑アル時ハ之ヲ發摘シタルモノ、姓名
ヲ明言セサル可ラサルモノトス

普救多ノ法律ニ據レハ罪犯アルニ方テ之ヲ宰官ニ告
發セス或ハ之ニ就テ宰官ヲ輔助スルヲ怠慢スルモ
ノハ責罰セラル、ヲ免レサリキ此法律ハ今日ノ政体
適當セス何トナレハ今日ハ乃チ人民ノ代訴官アリテ
其職ハ國安ヲ看護スルニ在ルヲ以テ國士ハ只其保護
ニ頼リテ安居スヘキナリ

第九回 政体相異ナルニ從ツテ刑辟ニ嚴寬ア
ルヲ論ス

刑辟ノ嚴酷ヲハ名譽ヲ主義トスル立憲政若クハ
德ヲ主義トスル共和政ニ於ケルヨリモ寧ロ畏懼ヲ主
義トスル處ノ專制政ニ取モ善ク適應スルニ若カサル
ナリ

寛和ノ政体ニ於テハ愛國ノ情、廉恥ノ風、譴責ヲ恐ル心
アリ此數者能ク人民ヲ約束シテ無數ノ罪過ヲ未發ニ防
止シ得ヘシ此政体ニ於テハ罪惡ヲ懲治シテ至嚴ナル
モ唯其罪惡ヲ暴白シテ警戒ヲ示スニ過キス是故ニソ
ノ法律ハ罪惡ヲ懲治スル頗ル温和ニシテ更ニ嚴厲ヲ
要セサルナリ

故ニ斯國ノ制法者ソノ人民ノ爲メニ法律ヲ制定スル

ニ方テ其志趣ノ傾ク處ハ專ラ罪惡ヲ防制スル點ニ多
クシテ懲治スル點ニ寡ナク其注意專ラ人民ノ道義ヲ
進善スルニ在テ刑辟ヲ施スノ上ニ在ラス

支那ノ學士恒ニ言ヘルヲアリ曰ク刑目益相増スニ從
テ國家ノ氣運ハ益顛覆ニ傾クト是レ刑辟ノ數相増ス
ハ人心風俗頹壞ニ因ルヲ以テナリ

泰西諸國ノ政府ソノ十ノ八九ハ概テ政治ノ寬暴ニ依
リ人民ノ自由權ヲ消長セシムルヲ以テ刑辟ノ煩簡ヲ
生シタリ之ヲ証明スルハ蓋シ難事ニアラス
專制政ノ人民ハ不幸ニシテ其ノ性命ヲ失フヲ憂フ
ルヨリモ其ノ死ニ就ク苦痛ノ甚シキヲ恐ル故ニ其刑

辟ハ嚴酷ナラサルヲ得ス寛和ノ政ニ於テハ人民死ニ就クノ苦痛ヨリモ其性命ヲ失フヲ憂フルモノ多シ故ニソノ刑辟ハ唯タ其性命ヲ奪フニ止マル凡ソ人快樂ヲ極ノ或ハ苦痛ニ堪ヘサレハ其ノ境遇ノ苦樂ハ固ヨリ全シカラスト雖モ其心ノ嚴厲ニ偏倚ススルハ俱ニ齊シキナリ戰勝ノ霸主ト苦修ノ僧徒トヲ見テ然ルヲ知ルヘシ吾人測隱ノ心ヲ發スルハ苦樂憂喜交々相雜テ命運一極ニ偏セサルキニ在リ一人ノ境遇相同シカラサレハ從テ其性情モ亦自ラ異ラサルヲ得ス之ヲ推シテ一國ノ人民ヲ論スルモ然ラサルハ無シ若シ一國ノ人運全ク開ケス營生ノ計ニ拙

ナク或ハ政治暴戾ニシテ一人_主君ニテ威福ヲ擅ニシ奢侈淫蕩至ラサル處ナク臣民ハ唯タ苦難凌辱之レ其分トスルカ如キ景況ニ在テハ國內上下ノ性情交々殘忍刻薄ナルヲ免レス之ヲ要スルニ慈悲仁惠ハ寛和ノ政ニ在ラサレハ行レサルモノトス

土耳其ノ史ヲ讀テ支丹_{土耳其}國帝_{土耳其}ノ獄ヲ治ムルノ條ニ至

レハ其刑辟ノ殘酷ナル當時人民ノ苦楚ヲ想像シテ未タ曾テ卷ヲ掩テ戰慄セサルハ無シ

政体寛和ニシテ而モ制法者賢明ナル時ハ人民ヲ治ムルニ各事各物ニ就テ刑罰ノ作用ヲ看出シ得可シ斯巴爾達ニ於テハ人民已カ妻ヲ人ニ貸シ或ハ他人ノ妻ヲ

借ルノ權利ヲ奪ハレ且ツ其家ニ在テハ處女ノ外相交
ルヘカラサルノ刑罰アリ其事甚タ怪シム可キカ如シ
ト雖モ尚ホ以テ人民ノ罪惡ヲ懲治スルニ足レリ蓋シ
其政果シテ寛和ナレハ何事ニ拘ラス苟モ法律ニテ刑
辟ノ名ヲ加フレハ則テ効驗ヲ得ヘキナリ

第十回 佛國ノ舊法ヲ論ス

佛國ノ古法ニ於テ立君政ノ精神ヲ含有セルヲ發見セ
リ即チ其罰緩ノ額ハ貴族ニ重クシテ平民ニ輕キ是レ
ナリ譬ヘハ刑辟ヲ收贖スルニ平民ハ四十ス一匹ノ
罰鍰ヲ納メ貴族ハ六十ス一匹ヲ納ムルカ如シ
然レモ加身ノ刑ニ至テハ之ニ反シ平民ニ嚴ニシテ貴
族ニ寛ナリ蓋シ貴族タルモノ一タヒ刑典ニ罹レハ則

チ朝廷上ノ面目ヲ失シ畢生不雪ノ瑕玷トナルヘケレ
モ平民ノ如キハ身體ノ外更ニ貴重スヘキモノナケレ
ハナリ

第十一回 人民有德ナレハ刑措ノ治致スヘキ事

羅馬人ハ德義頗ル篤厚ナリシカ故ニ制法者カ人民ノ
爲ノニ法律ヲ制定スルモ唯之ニ公義ノ道ヲ啟示スレ
ハ人民直チニ率由シテ悞ラスソノ德義ニ厚キヲ想見
スヘシ此時ニ方テハ法制禁令ヲ頒布スルヨリモ寧ロ
教諭訓戒ヲ垂示シテ充分ナリ
其ノ王國タル時ノ法律及ヒ十二銅表ノ刑辟ハ共和政

ノ時代ニ至リノハレリヤン
國王ヲ廢斥シタル後、フハ
定ニ出テタル法律ニシテ其後
再ヒ改正ヲ加ヘタルモノナリ
及ボルシヤン
羅馬國
四百五十
四年ノ制
ノ諸法ヲ制定スルニ及テ大概廢止ニ屬セリ
然レ此廢止ニ依テ曾テ政務民事上ニ一ノ妨害ヲ生
セシヲ見ス

此フハレリヤン律ハ若シ國士アリテ宰官ノ判斷ニ服
セス之ヲ國士總体ニ控訴スルヲアルモ宰官ノ權威ヲ
以テ之ヲ壓抑スルヲ禁制シ此法律ヲ犯ス者ハ唯タ
世人ヨリ不義ノ汚名ヲ蒙ル而已ニテ更ニ刑辟ヲ設
ケサリキ

第十二回 刑辟ノ作用ヲ論ス

法律極ノテ寛和ナル國民ノ輕罰ニ感動敬服スルヲハ
猶ホ他ノ國民ノ嚴刑ニ恐怖畏懼スルニ異ナラス是レ
實驗ニ徴シテ然リ
若シ國中ニ不便不利ノ一
起リ或ハ弊害交々生スル
アレハ暴烈ナル政府ハ一朝之ヲ撲滅セント欲シ而
之ニ着手スルニ方テ舊法古律ヲ執行スルヲナク新ニ
嚴酷ナル法律ヲ制定シ以テ其弊害ヲ矯正シテ痕跡ヲ
遺サス然レ氏政府ノ活機之カ爲ノニ衰弱シテ民心嚴
刑ニ慣レテ之ヲ視ル猶ホ寛政ニ於ルカ如ク恐怖ノ情
日ニ疎ナルニ從テ刑典嚴酷ニ移ラサルヲ得ス或ル國
ニテ路上ニ強盜橫行シテ其害甚タ大ナリケレハ之

ヲ防止セシカ爲メニ特ニ輪刑（按車輪ヲ以テ人ヲ軋殺スルモノ）ヲ設ケ

一時刑辟ノ慘酷ナルニ怖レテ犯人アラサリシカ未タ

幾クナラスシテ其横行ハ復タ前日ニ異ラサルニ至レ

リ

今日我國ノ兵隊ニ脱走ノ惡風流行シテ其數少ナカラ

ス此弊ヲ救防セント欲シテ死刑ヲ以テ之ヲ罰スヘシ

ト議定セリ然レモ死刑ノ設ケシカ爲メニ脱走人ノ減

セシヲ聞カス蓋シ兵士ノ常ニ慣習スル處ハ一モ其性

命ヲ抛ツニ在ラサルハナキカ故ニ慣習性ト爲テ性命

ヲ失フヲ恐レス或ハ恐ルモ敢テ其色ニ出サス死

刑慘ナリト雖モ之ヲ威服スルヲ能ハサルハ自然ノ勢

ヒナリ夫レ兵士ハ常ニ廉恥ヲ以テ教養シ甚タ廉恥ヲ

貴重スルカ故ニ兵士ヲ治ムルニハ宜シク終身不白ノ

恥辱モナルヘキ刑典ヲ施スヲ以テ治術ノ得タルモノ

トス概メ之ヲ言ヘハカノ刑辟ノ外貌相増スカ如キモ

ノハ其實ハ却テ作用相減スルモノナリ

夫レ人類ハ嚴酷ノ極点ニ偏スヘカラス吾人天授ノ方

便（按刑辟等諸ノ方ヲ施用スルニ方テハ須ラク謹慎以

テ方向ヲ悞ラサルヲ要ス若シ吾人其懷ヲ平虛ニシテ

人心頹壞ノ状態ヲ探究スルモ其原因ハ都テ罪ヲ犯

シテ罰ヲ免ルニ起テ決シテ刑典ノ寛和ナルニ起ラ

サルヲ看破スルヘシ

造物主人ニ賦スルニ羞惡ノ心ヲ以テシ之ヲ其鞭笞ト爲ス故ニ吾人宜シク天理ヲ体認シ乃チ汚辱ト爲ルヘキ刑典ヲ以テ罰責ノ至重ナルモノト看做スヲ要ス然ルニ一身ノ汚辱ト爲ルヘキ刑典ヲ蒙ムルモ恬トシテ相耻サルカ如キ國風アルヲ免レ難キハ必竟其政暴戾ニシテ人民ノ邪正善惡ヲ分タス全一ノ刑典ヲ施用シタルニ出テシモノナルヘシ
若シ又嚴刑ニ賴ルニアラサレハ以テ其人民ヲ警戒スルニ足ラサルカ如キ邦國アルハ其原由必ス政府暴烈ニシテ瑣末ノ過失ヲ懲ラスニ嚴刑ヲ施シタルニ疑ナシ

制法者現在ノ弊害ヲ改革セント欲スルニ方テハ其ノ思慮ノ見点唯タ改革ノ上ニ注キテ他ニ顧ミ到ラサルヲ往々之アリ已ニシテ弊害匡正ニ就クノ後ハ只タ制法者ノ嚴酷ノミ依然トシテ湮滅セス此嚴酷ヨリ生スル處ノ弊害終ニ國中ニ蔓延シ之カ爲ノニ民心頹壞シテ專制ニ慣習シ又之ヲ恐怖セサルニ至ル

リサンドル、雅典人ト戰テ大勝ヲ得タリ時ニ人アリ雅典人ノ罪ヲ訴ヘテ曰クカノ人民ハ曾テ二舟ノ俘虜ヲ舉テ之ヲ嶮岨ニ投シ且ツ若シ敵ヲ虜ニスルヲアラハ其兩手ヲ切斷スヘシト其國會ニ於テ議定シタリト故ニリサンドルハ雅典人ノ囚虜ヲ紉彈セシメテ終ニア

デマシテスヲ除クノ外都テ之ヲ鑿殺セリ蓋シアデマ
シテスハ雅典ノ國會ニテ此議定ヲ深ク不可ナリトセ
シカ故ナリ且リサンドルハフビロクスヲ誅スル前
ニ其罪ヲ責テ汝チ人民ノ心術ヲ邪惡ナラシメテ希
臘人ニ殘忍刻薄ノ一ヲ教授シタリト言ヘリ
プルタルキ曰ク雅典人ハアルギフス人カ其ノ國民千
五百人ヲ一時死罪ニ處セリト聞テ贖罪ノ祭禮ヲ執行
シ雅典人ノ心裡ニ此ノ如キ殘忍ノ念頭起サラン一ヲ
神明ニ祈禱セリ
人心ノ頽壞ニ二類アリ其一ハ人民法律ヲ恪守セサル
ノ時ニアリ其一ハ法律ノ爲ノニ却テ人心頽壞スルノ

時ニアリ其ノ法律ノ人心ヲ頽壞スルハ即チ之ヲ匡正
スヘキモノ已ニ自ラ頽壞スルカ故ニ救防ノ策アラサ
ルナリ

第十三回

日本ノ法律ノ完全ナラサル一ヲ論
ス按本國論スル所ハ今ヲ距ル百餘
ル年以前和蘭人ノ長崎出島ニ蟄居セ
ルヲ以テ和蘭人ノ傳聞スルモノニ係
之ヲ取捨スルハ安誕ノ事アリ然レ氏
故ニ斧削ヲ加ヘス之ヲ譯ス看客請
諒セヨ

刑典嚴過キルハ專制政ト雖モ之カ爲ノニ頽壞セラ
ルハ免レス日本ニ於テ其例ヲ得タリ

日本帝ノ如キ尊大無限ノ君主ニ背クモノハ之ヲ大罪

トナス故ニ此國ニ於テ罪ヲ犯スモノハ大概之ヲ罰スルニ死刑ヲ以テス其意犯人ヲ懲治スルニアラスシテ專ラ君主ノ權威ヲ暢達スルニ在リ然ル所以ノモノハ國民ハ全ク奴隸ニシテ而シテ帝ハ全國ノ所有主タルカ故ニ大小ノ罪皆ナ其利害ニ關係スルト謂フニ出ツルナリ

若シ宰官ノ前ニテ虚言ヲ陳スル者アレハ直ニ之ヲ死刑ニ處ス是レ天然ノ防禦法ニ戾リタル法制ナリ夫レ已ノ性命ニ係ル場合ニ於テハ一身ヲ防護セシカ爲メ人情ニ及スルト謂フ義ナリ吾人ノ眼ニテ敢テ罪犯トナサハルモノト雖モ亦少嚴

刑ヲ免カレス譬ハハ劇場ニ赴テ金銀ヲ棄擲スルカ如キ行爲アレハ死刑ニ處セラル、是レナリ

此國民ハ性質執拗剽悍ニシテ危險ヲ顧ミス災害ヲ恐レズ頑固ノ氣魄アル實ニ驚クニ堪ヘタリ故ニ法律極ノテ嚴酷ナリト雖モ之ヲ以テ制法者ニ殘忍不仁ノ名ヲ負シムヘカラサルナリ然レ氏天性其命ヲ愛惜スルコナク一點ノ小事ヲ以テ自ラ其腹ヲ屠ルカ如キ人民ヲ治ムルニ徒ニ刑辟ノ威ヲ以テスルハ適々以テ其心思ヲ固クシテ殘忍ナラシムルノミ爭デカ其性情ヲ改修シ其罪過ヲ警戒シ能フヘキヤ

遊客ノ紀行ニ日本人ノ教育ヲ記シテ曰ク此國ニテ小

兒ヲ教育スルハ甚タ温和ナリ然ラサレハ嚴刑ニ慣レ
テ其心殘刻ニ移ルノ恐アリ奴隸ヲ仕役スルニ甚タ仁
柔ナリ然ラサレハ自ラ其身ヲ捍禦シテ敵手ト爲ルノ
患アリト斯ノ一家ヲ治ムル性情ヲ以テ之ヲ國家ノ政
刑ニ施スルハ其治ヲ致ス實ニ容易ナルヘキニ茲ニ想
ヒ到ラサルハ何ソヤ

抑モ明君賢相ノ勵精シテ國ノ爲メニ制ヲ立テ法ヲ設
クルヤ必ス刑賞勸懲ノ權衡ヲ平持シ理義道德或ハ教
法ノ如キ訓戒教諭ヲ人民ノ氣質ニ應シテ施行シ或ハ
賞譽ノ典則ヲ設テ勸獎シ又ハ福利ヲ看護シテ生計ヲ
安全ナラシムル等ノコトヲ以テ其心思ノ偏倚セルヲ救

防スルノ治術ト爲スヘシ且若シ制法者人民ノ嚴刑ニ
慣テ恐レス寬典以テ之ヲ處スル能ハサルノ患アレハ
更ニ他ノ方術ヲ求メテ以テ民心ノ漸々斯ニ歸スルヲ
謀リ民心嚴刑ニ慣レテ險惡風ヲナスノ處ニ於テ有恕ノ
特典ヲ與ヘテ妨ケ無キモノハ則チ其罪ヲ放免シ之ヲ
擴充シテ一切ノ事件悉ク寬假ニ止マルヲ期ス可シ然
レモ此數件ノ如キハ專制政ノ得テ用フヘキ活機ニア
ラス故ニ假令能ク之ヲ實施スルモ適々濫用ノ弊ヲ招
クノミニテ更ニ其功效アルヲ期スヘカラス日本ノ如
キハ其勢ニ增長シテ止マス已ニ嚴酷ノ區域ヲ超エタ
ルモノト謂フヘシ

民心猖獗ナレハ慘酷ナル刑辟ヲ用ヒサレハ之ヲ懾服
スル能ハス是レ乃チ日本ノ法律ノ淵源ニシテ其精神
モ亦タ此點ニ在リ而シテ其法律ハ徒ニ暴烈ナルノミニ
シテ勢力却テ孱弱ナルヲ免レス日本ハ其力能ク耶
蘇ノ教徒ヲ壓殺シテ子遺ナキヲ得タレトス如ク理
義ニ乖戾スルノ事ニ盡力セシハ適々以テ其孱弱ノ一
斑ヲ表明スルニ過キサルナリ
茲ニ一事ノ記スヘキアリ國帝宴樂ニ耽テ皇后ヲ冊立
セス一旦大事アルニ臨テハ大緒ノ紹クモノ無キヲ憂
ヘテ教皇ヨリ美女二名ヲ賜ヘリ帝其命ニ違ハスシテ
其一ヲ納レタレトモ寵幸ナシ故ニ傳保タル者令ヲ

國中ニ下シテ美人ノ稱アルモノ、數ヲ盡シテ之ヲ召
集シ而シテ一人、其意ニ適スルモノナシ其後纔カニ西人
ノ女寵遇ヲ得テ一子ヲ生ノリ宮女輩其至賤ノ身ニシ
テ恩幸ヲ得タルヲ憤リ竊ニ其子ヲ壓殺セリ若シ此事
帝ノ耳ニ達スル時ハ血流レテ渠ヲ爲サ、レハ震怒ヲ
洩スヘカラサルニ依リ之ヲ秘シテ一人ノ敢テ其事ヲ
告發スルモノ無カリシト是レ法律嚴ニ過キテ却テ之
ヲ必行スル能ハサルモノナリ故ニ刑辟ノ嚴酷ニ過キ
タルハ罪ヲ犯スモ之ヲ罰スルモノナキニ至ル實ニ免
レサルノ弊ナリ

第十四回 羅馬元老院ノ精神ヲ論ス

アシリユス、グラブリヨ及ヒビソーノ統領タリシキニ
アシリヤン律アシリヤン律ハ即チ犯罪ノモノヲシテ
罰鍰ヲ出サシメテ将来元老院ノ議
員タルハ勿論官吏ニ擧ケテ制定シテ
鑽刺賞縁以テ政
府ノ官爵ヲ希圖スルヲ防止シタリ
デイオーノ政論
ニ曰ク元老院ヨリ統領ニ命シテ此ノ法律ヲ制定セシ
ノタル所以ハ蓋シ當時民憲官タリシコル子リユース
カ嚴刑ヲ設テ以テ此罪ヲ犯シタル者ヲ處斷スヘキニ
決意シテ民心モ大ニ之ニ歸嚮シタリシカ故ナリ然ル
ニ元老院ノ審議ニ以爲ラク嚴刑ハ實ニ以テ一時ノ民
心ヲ威服スルニ足ルト雖モ其弊タルヤ後日ニ至テ假
令犯罪ノモノアルモ之ヲ縱容シテ告訴セス告訴スル

モ亦之紀彈セサルニ至ルヘシ之ニ反シテ刑辟寛和ナレハ
常ニ之告發スヘシ之ヲ告發スレハ必ス法官アリテ之ヲ
紀彈シ犯人アリテ其罪ニ服スヘシト是至當ノ論ナリ
第十五回 羅馬法律ノ刑辟ニ係ルモノヲ論ス
羅馬人ノ治圖ニ注目スルニ政体ニ改革アレハ必ス之
ニ從テ又其民法ヲモ改革セシ事正ニ予カ夙論ニ吻合
シ而シテ其刑典ハ政府ノ性質ニ因縁シテ相離レサル
ヲ看出セリ

曾テ王國ノ時ニ逃亡者、奴隸及ヒ流氓匪徒ヲ懲治スル
カ爲メニ制定シタル法律ハ嚴酷峻烈ヲ極メタルヲ以
テ共和政ノ精神ニ於テハ決シテデセムウ井ル按十員ノ專政

官ヲシテ此苛法ヲ十二銅表中ニ編入セシメサルハ當
然ノ理ナリシカニ暴政ヲ希圖スル人^{アル}ハ共和政
ノ精神ニ遵從セス之ヲ奈何トモシ難キモノアリ

李維ハテユリユス、ホステ井リユスカ^{アル}阿爾巴ノ總領官

デ井クテタルメデユス、ソフヘスヲ刑スルニ馬車

二輛ヲ以テ其身ヲ支裂シタルヲ論シテ仁慈ノ道、人

心ノ腔裏ヲ脱去シタル絶前絶後ノ一奇獄ト云ヘリ然

レ氏十二銅表ノ法律中ニハ此ノ如キ嚴刑^{十二銅表ノ}法律中ニハ

火刑アリ之ヲ常ニ極刑ト比々トシテ之アリ李氏ノ論

ス又竊盜ヲモ死刑ニ處ス

ハ誤ナリ
デセムウ井ルノ志向ハソノ譏客詩人ヲ罰スルニ極刑

ヲ用ヒシニ依テ顯然掩フ可ラサルモノアリ抑モ共和
政ノ人民ハ尊貴ノ人ヲ屈服セシムルヲ悦フモノナレ
ハ此刑罰ヲ設ケシハ大ニ其政体ニ乖戾セリ然レ氏人
民ノ自由ヲ抑制スル目途ノ人^{アル}ハ人民ノ精神ヲ
興起振作スル著述議論ヲ畏忌スルハ免レサル處ナリ
意ヲ以テ誹謗刺譏ノ刑律ヲ増加セリ
デセムウ井ル廢黜ノ後ハ殆ト一切ノ刑律ヲ廢止シタ
リ但シ之カ廢止ノ明文アルニアラサレハ^{アル}ボルシヤン
ノ法律ニ羅馬ノ國民ハ決シテ死罪ニ處スヘカラスト
ノ一條ヲ加ヘシヲ以テ此等ノ極刑ハ已ニ無用ニ歸セ
シナリ

李維カ羅馬人ヲ評シテ未タ此國民ノ如ク刑辟ノ寛和ナルヲ悦フモノアラスト論セシハ全ク當時ノ事ヲ指シテ言フナルヘシ

其刑辟ノ寛和ナルノミナラス若シ夫レ訟獄ノ未タ完結セサル前ニ糾彈ヲ受クヘキ人ヲシテ自ラ其國ヲ脱去シ得ヘキ權利ヲ受用セシムルカ如キニ至テハ羅馬人ハ予カ先ニ論セシカ如ク全ク共和政天然ノ精神ニ從ヒシモノト謂テ可ナリ

暴虐無法及ヒ自由ヲ混全並行シタルシルラーハコル子リヤシ律ヲ制定シ其志意ハ全ク新ニ無數ノ罪目ヲ造出スヘキ規則ヲ立テシカ如シ其大畧ヲ言ハンニ數

多ノ行爲ヲ區別シテ之ニ故殺ノ名ヲ下セシヲ以テ故殺ノ罪ヲ犯スモノ國中ニ踵起シ其状恰モ至ル處ニ陷罪ヲ設ケ荊棘ヲ排ヘテ以テ人民ノ手足ノ之ニ罹ルヲ待チシモノニ異ナラス

シルラーノ法律ニテハ水火ノ極刑ヲ以テ罪惡ヲ懲治セルモノ十中ノ八九ニ居レリ其後該撒ノ治世ニ至テ財産沒收ノ一律ヲ追加シタリ蓋シ從來ノ法律ニテハ罪人其國ヲ追放セラル、モ私有ノ財産依然トシテ恙ナキヲ以テ毫モ顧慮スル處ナク益其罪惡ヲ犯スヲ多キヲ以テナリ

帝爵國タルニ及テ武治政府ヲ設立シタリ抑モ武治ノ

性タル臣民ノ之ヲ恐怖スルカ如ク齊シク君主モ之ヲ
恐怖セサル可ラサルヲ悟得セシヲ以テ勉メテ之ヲ
節制寛和ナラシメント欲シテ乃チ位階品級ヲ設ケ之
ニ儀禮制度ヲ加ヘテ上下尊卑ノ分ヲ立タリ
政体漸ク立君ノ制ニ近クニ從テ刑辟モ亦分レテ三類
トナレリ第一類ハ國中貴人ニ加フル刑辟ニシテ其律
頗ル寛和ナリ第二類ハ中等ノ位地ニ施スモノニシテ
稍々嚴厲ヲ加ヘ第三類ニ至テハ以テ卑賤下流ヲ懲罰
スルモノニテ嚴酷ヲ極メタリ
マキシミヌス帝ハ武治政ノ暴威ヲ節制シテ寛和ナラ
シムヘキニ却テ之ヲ增長セシメタリ宜ヘナル哉此帝

ニ暴烈暗愚ノ名ヲ與ヘシカピトリヌスノ言ニ據レ
ハ當時ニ在テハ唯タ某人ヲ磔殺シ某人ヲ猛獸ニ投シ
或ハ其屍ヲ獸皮ニテ縫着セシト言フヲ元老院ニ報
知セシノミニテ絶テ該院ノ爵位德望ヲ尊敬セシ等ノ
一無シトナリ帝ハ軍律ヲ模型トシテ文治ヲ修メント
欲スルニ似タリ

羅馬ノ盛衰原因論ヲ讀ムモノハコンスタンチン帝カ
武治政府ヲ一變シテ文武併兼ノ政府ト爲シ漸々立憲
ノ政治ニ近ツカシメシ事情ヲ曉知スヘシ此國ハ革命
ノ變ヲ經歷セシ一四ニ止マラス嚴厲ノ政一轉シテ
偷安ノ政ト爲リ偷安ノ政再ヒ轉シテ罪ヲ犯スモ刑ヲ

受ケス殆ト無法ノ國トナレリ

第十六回 罰ト罪トノ權衡平ヲ得ヘキヲ論ス

大罪ヲ未發ニ制スルハ輕罪ヲ防クヨリモ一層注意ノ深カラシム要ス又社會ノ公害ト爲ルヘキモノヲ防クハソノ甚タシカラサル者ヲ避クルヨリモ更ニ警察ノ密ナランヲ要ス刑典ノ輕重ニハ斯クノ如ク必ス一定ノ準則アリテ其罪ノ輕重ニ應セサル可ラス之ヲ制法ノ要ト謂フ

昔時羅馬ノ東都ニ匪徒アリ自ラコンスタンチン、デユカスト稱シ反亂ヲ唱ヘテ捕縛ニ就キ審明ノ上鞭刑ニ處セラレタリ然ルニ此犯人又曾テ國中ノ貴顯ヲ誣告

セシテ發覺シテ乃チ讒謗ノ罪ニ坐シテ火刑ニ死セリ夫レ反亂ハ大逆ノ罪ナリ而メ其刑ノ輕キヲ斯ノ如ク讒謗ハ輕罪ナリ而メ其刑ノ重キヲ斯ノ如シ刑典ノ寬嚴其平ヲ失セシテ實ニ驚クヘキモノアリ

此事ニ就テ覺ヘス英王チヤルレス第二世言ノ理アルヲ看出セリ一日王途上ニ於テ囚人ノ架刑ニ坐スルヲ見テ其左右ニ犯罪ノ狀ヲ問ハシム侍臣此囚人ハ曾テ書ヲ著シテ陛下ノ宰相ヲ讒謗セル罪ニ坐スト答フ王之ヲ聞テ嘆シテ曰ク愚ナル我囚人ヨ何爲ソ宰相ヲ讒謗セルヤ若シ朕ヲ讒謗セハ宰相ハ却テ汝ノ罪ヲ不問ニ置クヘキモノヲ言フ即チ前條ノ反逆ノ罪ハ輕ク讒謗

ノ罪ハ重キ所以ヲ
説明セルモノナリ

バシル帝ノ時七十人ノ匪類アリテ反逆ヲ謀レリ帝乃
チ之ヲ鞭刑ニ處シ其頭髮ト鬚トヲ焚テ放免セリ一日
帝園囿ニ遊ヒ狂鹿アリ其角帝ノ帶ニ繫リテ放レサレ
ハ侍衛ノ臣劍ヲ拔テ帝ノ帶ヲ斷チテソノ危急ヲ救ヘ
リ然ルニ此臣ハ君主ニ對シテ兵刃ヲ用ヒタリト云フ
罪ニ坐シテ梟首ニ處セラレタリ誰カ一君ノ刑典ニシ
テ斯ノ如キ輕重ノ顛倒アルヲ信シ得ヘキヤ
我國ノ法律ニ路上ニ於テ劫盜ヲ爲セシモノト劫盜ニ
シテ兼テ人ヲ殺シタル者トヲ懲治スルニ輕重ノ差ア
ルヲ無シ一ノ大槩ト謂ハサルヲ得ス抑モ人民ノ安全

ヲ保護スル爲ノニハ必ス其間ニ寬嚴ノ別ナカルヘカ
ラス

支那ニ於テ劫盜ヲ行ヒ且人ヲ殺ス者ハ處刑ノ後其屍
ヲ肢解スレヒ劫盜ノミノモノハ誅殺スルニ止マル刑
典ノ中此差別アルヲ以テ彼國ニ於テハ劫盜行ル、ト
雖モ兼テ人ヲ殺スモノアルヲ無シト云フ

魯西亞ハ劫盜ト人ヲ殺ス者トヲ罰スルニ全一ノ刑ヲ
以テス故ニ盜ヲ行フモノハ必ス人ヲ殺ス其ノ恆言ニ
曰ク死人ハ言ハスト

若シ法律ノ中ニ此輕重ノ差ヲ立テサルハ必ス犯人
ヲシテ赦免ヲ希望スルノ情ヲ懷カシムルヲ要ス英國

ニ於テハ路上ニ劫盜アリト雖モ曾テ人ヲ殺セシトナ
シ是レ劫盜ノ罪ハ時トシテ一等ヲ減シテ遠流ニ處セ
ラル、トアレハ人ヲ殺スノ罪ニ至テハ決シテ赦免ヲ
望ムヘカラサレハナリ
君主ノ赦詔ハ寛和ノ政府ニ在テハ實ニ懿美ノ要具ト
ナス若シ君主此特權ヲ施用スルニ方テ謹慎明察ニシテ
濫妄ノ弊アラサレハ著シキ効果ヲ生シ得ヘシ專制ノ
政ハ赦免ヲ與ヘス又之ヲ得ヘカラス故ニ此ノ利益ヲ
有スルヲ無シ

第十七回 拷問ヲ論ス

人類ノ不善ヲ免レ能ハサルヨリ遂ニ法律ニ於テ人ヲ

視ルヲ其實業ヨリモ善良ナリト認ムルノ已ムヲ得サ
ルニ至レリ故ニ一件ノ訟獄ニ就テ二個ノ證人アリ口
供一途ニ出ルハ法律ノ點ヨリ見テ之ヲ眞實ノ言ト
爲シテ之ヲ裁決シ又婚禮ヲ行フタル夫婦ノ間ニ所生
ノ子女ハ之ヲ正嫡ト見做サ、ルヲ得ス是レ法律ハ人
ノ母タルモノヲ信シテ貞節ヲ守ルトシテ裁判スレハ
ナリ然レハ刑具ヲ用ヒテ罪人ヲ拷訊スルニ至テハ斯
ノ如ク不得已ノ三字ヲ以テ口實ト爲スタ得ス
活眼ヲ開テ隣近ノ一國英ヲ視ヨ將ニ至善至美ノ政体
ヲ設立シテ人民ノ其福澤ニ沐浴スルモノアルヲ認得
スヘシ此國ハ已ニ罪人ノ拷問法ヲ廢止シタリ然レハ

之カ爲ノニ不便不利ノ起リシヲ聞カス因テ知ル拷問ハ素ト國家ヲ治ムルノ要具ニアラサルヲ雅典ノ謀反大逆ノ罪ノ外ハ刑具ヲ用フルヲ得ス苦刑ハ其罪ヲ彈劾シテヨリ三十日以内ニ非サレハ之ヲ用フルヲ得ス其地、爵位、武職ノ人モ謀反大逆ノ罪ヲ犯スニアラサレハ門地、爵位、武職ノ人モ博學賢明ノ士、踵ヲ接シテ起リテ拷掠スヘカラサルヲ剗論シテ復タ餘蘊ナシ故ニ茲ニ再ヒ其利害ヲ喋々スルヲ要セス然リト雖モカノ畏懼ヲ懷カシムルヲ政府ノ大綱ト爲ス處ノ專制國或ハ往古希臘羅馬ノ奴隸ニ於テハ之ヲ施シテ適當スルモノアラシカト説キ到ラント欲セシカニ遂ニ其ノ天理ニ逆フ可ラサルヲ知リテ筆ヲ擱セリ

第十八回 錢刑、膚刑ヲ論ス

我カ歐人ノ先祖ナル日耳曼人ハ罰錢ヲ除テ他ノ刑律ヲ用ヒシト無シ此人種ハ自主自由ヲ愛重シ戰鬪ヲ好ム氣質アリ故ニ兵刃ヲ執テ相戰フキニ非レハ決シテ其血ヲ流スヘカラサル者ト思ヘリ之ニ反シテ日本ニ於テハ銀ヲ納レテ罪ヲ贖フトヲ許サス富者ハ之カ爲ソニ刑典ヲ倖免スルノ患アルヲ口實ト爲セリ是レ然ラス富者ト雖モ豈其資産ヲ失フヲ恐レサルモノアラシヤ且錢刑ハ人民ノ貧富ニ應シテ多寡ノ不同アルニアラスヤ又罰錢ノ上更ニ汚辱ノ一事ヲ加フヘキアルニ於テオヤ之ヲ聽カサルハ其理ナキナリ

賢明ナル制法者ハ公平明允ヲ以テ權衡ト爲シ錢刑ニ偏ヒス膚刑ニ倚セス常ニ其中ヲ執レリ

第十九回 報復ノ法ヲ論ス

法律ノ簡易ナルヲ好ムハ專制國ノ常ナリ故ニ報復法報復法ノ經典可彌ニハヲ用ユルヲ甚タ屢々ナリ立君政ト雖亦動モスレハ之ヲ採用スルアリ然レ氏其間自ラ分界アリテ專制國ハ專ラ之ヲ施用シ立君國ニ於テハ必ス一定ノ制限ヲ設クルナリ

羅馬十二銅表ノ法典ニハ二類ノ報復法ヲ掲ケタリ其一ハ原告ノ志意ヲ満足セシムル能ハスシテ他ニ方策無キノ時ニ限りテ之ヲ許シ其一ハ罪案ヲ擬定セル

ノ後贖錢ト其利息トヲ納レ以テ實決ヲ免カル、是レナリ故ニ之ヲ加身ノ刑ヲ改メテ罰錢ト爲セシモノト謂フモ可ナリ

第二十回 父ヲシテ子ノ罪ニ連坐セシムルヲ論ス

支那ニ於テ父ハ子ノ罪ニ連坐シテ刑典ニ罹ルヲ免レサルモノトス○白露ノ制度モ亦タ然リ俱ニ專制政ノ志意ニ出タル法制ナリ

支那ニ於テ子罪ヲ犯スニ就テ父ヲ罰スルノ意趣ハ人ノ父タル者天賦ノ性ト人定ノ法トニ依テ確立シタル父權ヲ盡シテ以テ其子ヲ制御スル能ハサルト云フ

ニ由レリ無理ノ至リナラスヤ支那人ハ廉耻道ヲ知ラス
ト謂フサルヲ得ス我國ニテ若シ不幸ニシテ刑典ニ罹
ルモノアレハ其ノ父母子弟タルモノ人ノ子ハ之ヲ罰
セサルノミナラス其父ノ惡ハ面目ヲ失シテ不雪ノ辱
ニ與セサルヲ賞スヘキナリト爲シ之ヲ恐ルハ一猶ホ支那ニ於テ其身自ラ誅戮セ
ラル、カ如シ

第二十一回 君主ノ仁恤ヲ論ス

仁慈ハ人君獨有ノ徽章ナリ共和政ハ懿德アリテ主義
トナルカ故ニ必スシモ仁慈ヲ以テ必須ノモノトセス
專制政ハ專畏懼ノ二事ニ依頼シ威權ヲ以テ貴顯ノ跋
扈ヲ壓制ス故ニ仁慈ヲ用ユルヲ亦タ甚タ尠ナシ立君

政ノ如キハ否ラス名譽ヲ以テ氣力ト爲シ名譽ノ存ス
ル處ハ法律ノ所禁ヲモ敢テ冒スアルカ故ニ仁慈ハ殊
ニ欽ク可ラサルモノト爲レリ此政ニ於テハ都テ体面
ヲ汚辱スルヲ以テ懲責ト認メ法官ノ審判ヲ受ルヲ以
テ已ニ刑罰ニ罹ルノ思ヲ爲ス是レ蓋シ汚辱ヲ以テ一
種ノ刑典ト爲シ汚辱ノ罪人ヲ懲スハ其效刑辟ヨリモ
更ニ大ナレハナリ

立君政ニ於テ貴顯ノ人ヲ懲罰スルニハ加辱ノ法ヲ用
ヒテ富財、信用、朋友、遊樂(時トシテハ唯タ想像上ノミニ
止マル)アリト雖モ等ヲ禁絶シテ其自由ヲ束縛ス此
禁絶法ハ深ク其人ヲ儆責スルニ足ルヲ以テ更ニ嚴厲

ナル刑辟アルヲ要セス且ツ其加辱ノ法タルヤ唯タ君
主ニ親近スルノ寵幸ヲ褫革シ榮貴ノ位地ニ在テ衆人
ノ尊敬ヲ得ヘキヲ追奪スルニ止マルナリ
貴顯ノ人ソノ身家ノ安固ヲ保チ難キハ專制政ノ性質
ノ然ラシムル處ニシテ立君政ハ之ニ反シツノ確固安
全ナルヲ以テ其政体ノ休戚相關スル處ト爲セリ
抑モ人君タルモノ仁慈ノ一事ニ賴テ以テ所獲ノ利益
ハ極メテ廣大ニシテ愛敬焉ニ生シ榮譽焉ニ立ツ故ニ
人君ハ仁慈ヲ施スヘキ機會ヲ得ルヲ以テ福利ノ倚ル
處ト認メサルヘカラス況ヤ之ヲ施スヘキ機會隨處發
生スルニ於テヲヤ

時トシテハ君權ノ一部ヲ相爭フモノナキヲ保チ難シ
ト雖モ其全鼎ヲ覬覦スルカ如キハ曾テ之アラサルナ
リ又時トシテハ人君ハ王位王冠ノ爲メニ相戰フヲア
ルヘシト雖モ其性命ノ爲メニ相戰フヲハ必ス無キ
ナリ

或人問テ曰ク之ヲ罰シ之ヲ赦スニ其機ナカルヘカラ
ス然ラハ則チ如何ニシテ其機ニ投シテ能ク賞罰ノ當
ヲ得ヘキヤ答テ曰ク其機ヲ看破スルハ規矩ニ依テ之
ヲ測ルヨリモ更ニ容易ナリ若シ仁ヲ行フテ害アルカ
如キハ其害至テ見易キモノナルカ故ニ之ヲ人君柔弱
ニシテ刑ヲ失シ侮ヲ受ルカ如キモノト甄別スルハ決

シテ難事ニアラサルナリ
マウリス帝ハ臣民ノ血ヲ視サルヲニ決意シアナタシ
ウス帝ハ全ク刑ヲ措テ施サスイサーク、アンゼルス帝
ハ治世中決シテ一人ヲ戮セシト誓ヒタリ希臘ノ諸帝
ハ人君ハ授劍ノ責任アリト云フヲ忘レタルモノナ
リ按仁慈ハ人主ノ徳ナリト雖モ之ニ偏スヘカラス本
義諸帝ノ刑ヲ措テ用ヒサルハ人君タルモノ、人民ノ
正義公直ヲ達スルカ爲ノニ稟ケ得タル刑罰ノ權ヲ施
スニ堪ヘサルモノナリ

萬法精理卷之六終

萬法精理卷之七

何 禮之譯

政府ノ主義相異ナルニ從ツテ節儉律奢侈及ヒ女
子ノ分限ニ不同ヲ致スヲ論ス

第一回 奢侈

奢侈ノ物タル全ク他人ノ勞力ニ依リテ得ル所ノモノ
ヲ受用スルノ便利ニ胚胎スルカ故ニ若シ一國人民ノ
富ヲ平均シテ彼此相同カラシメハ絶テ之アルコナカ
ルヘシ因テ奢侈ノ消長ハ唯タ貧富ノ平均ヲ失シタル
程度ニ應スルモノタルヲ知ルヘキナリ

若シ貧富ヲ均分シテ過不足ナカラシメント欲セハ宜シク法律ヲ設爲シ以テ各人ノ所有ヲシテ性法上ノ需要ニ於テ萬々缺ク可ラサルノ分限ニ止ラシムヘシ苟モ此ノ分限ヲ超ユル時ハ或ハ其財ヲ糜費シ或ハ之ヲ收獲シ一出一入彼此ノ間ニ運行シテ忽チ貧富ノ平均ヲ失スルハ必然ナリ

譬ヘハ茲ニ甲人アリ性法上ノ需要ニ於テ一家ヲ扶持スルニ萬々缺ク可カラサルノ富ヲ有シテ更ニ餘裕ヲ得サルモノナリ此富ヲ若干ノ額數ト假認シ其額數ヲ稱シテ奢侈ノ零度トナス（按）之ヲ以テ貧富ヲ判然ルニ別スルノ天元ト定ム然ルニ若シ乙人ノ富其需要ヲ達スルニ足ル處ノ額數ニ一倍

スル時ハ則チ乙人ノ富ヲ奢侈ノ一度ト稱ス可シ若シ又丙人アリ其家計ノ富裕ナル乙人ニ一倍スルモ其富ハ奢侈ノ三度ナリトス若シ又丁人アリ其財更ニ丙ニ一倍スル時ハ七度ノ奢侈ヲ享用スト謂フ斯ノ如ク丁ノ富ハ常ニ丙ニ倍シ丙ノ富ハ又常ニ乙ニ倍スルモノトシテ之ヲ算計スルカ故ニ乙丙丁ノ奢侈ハ互ニ相乘シテ加増シ其遞加ノ計數ハ左表ノ順次ト爲ル即チ

甲	零度	奢侈ノ零度	乙	一度	奢侈ノ初度
丙	三度		丁	七度	
戊	十五度		己	三十一度	
庚	六十三度		辛	百二十七度	

普拉多ノ共和政ル初等ノ富ハ單ニ世襲ノ口田ヲ所有ス
シテ第三等ヨリ第四等ニ至ルハ口田ノ外ノ富ヲ算計
但シプラトノ法律ハ人民ノ富、其口田ノ三倍ノ上ニ
超ユルヲ准許セザリシヲ以テ第二ニ於テハ人民ノ奢侈
四等以上ノモノハ之アラザリキニ於テハ人民ノ奢侈
ヲ計算シテ四等ノ分限トナス即チ初等ハ富ハ纔カニ
貧乏ノ分界ヲ免レタル者、第二等ハ其富、初等ニ一倍シ
第三等ハ三倍シ、第四等ハ四倍スル者はレナリ故ニ初
等ニ於テハ其奢侈乃チ零度ニ當リ、第二等ノ奢侈ハ一
度ニ當リ、第三等ハ二度ニ當リ、第四等ハ三等ニ當リ、其
遞加ノ計數ハ一等ニシテ一度ヲ加フルノミ
兩國人民ノ貧富ヲ比較シテ其奢侈ノ度數ヲ得シニハ
先ツ一國中ニテ各人ノ貧富ノ不同ト又兩國相對シテ

人民一体ノ貧富ノ差トヲ通算シテ復比例ノ方法ヲ用
ヒテ之ヲ得可キナリ波蘭ノ一國ヲ以テ之ヲ例センニ
國內人民ノ貧富ハ甚タ懸絶ナルモノアリト雖モ之ヲ
全体ヨリシテ通算スルハ貧者多キニ居ルカ故ニ之
ヲ他ノ富者多キ國ニ比較スレハ奢侈ノ度數甚タ低キ
モノトス

奢侈ノ度數ハ又其國內府邑ノ人煙ノ疎密多寡アルニ
相關スルモノナルカ故ニ其實數ヲ得ント欲セハ全國
ノ富ト各人貧富ノ差ト之ニ各地ニ棲息スル人口ノ多
寡ヲ加ヘテ復比例ノ法ヲ以テ算計ス可シ

府邑ノ人煙漸ク繁殖スルニ從テ居民ノ意思漸ク虚榮

空名ヲ好ムノ情ヲ生シ各其邊幅ヲ修メテ以テ体面ヲ
誇耀セント欲スルニ至ル若シ其人口極メテ衆多ニシ
テ自他互ニ識面ノ人尠キカ如キ時ハ其虚飾タルヲ覺
知セラル、モ亦タ甚、尠ナキヲ以テ之ヲ人口寥々ノ地
ニ比スレハ虚榮空名ヲ好ムノ熱心更ニ倍蓰スルモノ
ナリ且夫レ奢侈ハ此等ノ希望ノ媒妁タルカ故ニ各其
体面ヲ虚飾シテ以テ他人ヲシテ分外ノ尊敬ヲ起サシ
メントス然レハ虚飾ヲ專尚スル事自他ノ別ナク衆人
皆ナ然ラサルハ無キカ故ニ彼此平均シテソノ氣餒却
テ止息シ各人他ノ尊敬ヲ得ント欲シテ竟ニ一人ノ之
レヲ顧ミルモノナキニ至ル

茲ニ於テ一般ノ不便利始メテ相生ス凡ソ一業一術ニ
精通スル者アレハ已カ所欲ニ從ツテ勞力ニ價值ヲ付
シ其才能稍々劣レル者ト雖モ亦其例ニ倣ハサルハ無
ク素ト吾人ノ需求ト之ヲ満足セシムル方便ノ間ニ一
定ノ比例アリシモノ忽チ地ヲ拂テ消失ス故ニ吾人若
シ已ムヲ得スシテ訴訟ニ從事スルキハ必ス律師ヲ雇
ヒ又疾病アルニ遇ヘハ必ス醫生ヲ招請スヘキ鑒識ナ
カラサル可ラス

數萬ノ人民一都府ニ麇集スルキハ生計ノ道甚タ艱難
ニシテ住民互相ノ便利却テ閉塞シ大ニ交易ノ妨碍ト
爲ルト是レ數家ノ論ナリ予ハ以テ然リトセス凡ソ人

民一處ニ嚮集スレハ希望、需用、嗜好、皆ナ從ツテ増加ス
ルカ故ニ交易モ又タ從ツテ繁昌セサルヘカラサルナ
リ

第二回 民主政ノ節儉律ヲ論ス

貧富能ク平均ヲ得タル共和政ニ於テハ更ニ奢侈ノ何
物タルヲ知ラサルハ既ニ第五卷ニ論セシカ如シ抑
モ共和政ノ純美ニシテ自餘ノ政体ニ優ル所ハ全ク分
配ノ平均ヲ得ルニ在ルヲ以テ奢侈ノ度數益低ケレハ政
治益完備ナルモノナリ羅馬ノ初世及ヒ希臘ノ人民ニ
ハ絶テ奢侈ノ事アルヲ見ス實ニ共和政能ク此貧富ノ
平均ヲ失セサルハ交易ノ精神ヲ振作シ工業ヲ勤メ

懿德ヲ養ヒ以テ人民ヲシテ各自ノ資財ニ依リ其生計
ニ安シ其分限ヲ守ラシメテ奢侈ノ增長スルヲ抑防シ
得可シ

或ル共和政ニ於テハ新タニ土地均分ノ法律ヲ必須ナ
リト認メテ熱心ニ之ヲ實施センヲ謀レリ此法律ハ
性質極メテ公利公安ヲ進ムルニ足ルヘシト雖モ唯タ
之ヲ實施スルニ概ノ急劇草率ニ出テ一時ニ甲ノ富ヲ
裂テ乙ニ與フルノ痕跡ナキヲ免レサルヲ以テ忽チ數
家ノ顛覆ヲ來タシ數家ノ顛覆蔓延シテ一國ノ擾亂ト
ナル甚タ危險トスル處ナリ

共和政ニ於テ奢侈漸ク風ヲ爲スニ至テハ民心純一ナ

ラス各自私利ニ趨リテ公義ヲ忘ルハ必然ノ勢ヒナ
リ若シ能ク人民ヲシテ唯タ其需要ヲ充タスニ止ラシ
ムレハ一身ノ名譽ト一國ノ光榮トヲ希望スルノ外更
ニ其情欲ヲ誘掖スルモノナカルヘシ夫レ一タヒ人民
ノ志向漸ク奢侈ノ惡習ニ薰染スルキハ無量ノ欲情從
ツテ發生シ其勢ヒ奢侈ヲ制限スル處ノ法律ヲ仇視ス
ルニ至ルハ蓋シ又久シキニアラサル可シ故ニレシヨ
鎮ノ戍兵カ漸ク奢侈ノ惡習ニ移リシヲ以テ乃チ其住
民ヲ屠殺セルノ前兆ト謂フモ亦其理ナキニアラス
羅馬人ノ志向將ニ頹壞セントセシヤ物欲熾シニ發生
シテ廢クヲ知ラス當時物價ノ不廉ナルヲ見テ其景

況ヲ想像ス可シフハレルニヤン酒一壺ノ價一百テナ
リ羅馬ノ貨幣ポントユスヨリ輸入シタル鹽肉一桶ノ價
四百テナリ上等ノ厨人其給料四タレント羅馬ノ貨幣
侍童ニ至テハ其高キヲ價值ノ外ナリ奢侈ノ流行斯ノ
如シ縱令懿德ノ人アリト雖モ亦之ヲ奈何トモ爲シ能
ハサルナリ

第三回 貴族政ノ節儉律ヲ論ス

貴族政ノ制度其宜シキヲ得サルモノニ於テハ一國ノ
富財舉テ權貴ノ家ニ輻輳スヘシト雖モ奢侈ハ此政體ノ
主義タル謹度ニ背馳スルカ故ニ切ニ之ヲ禁費スルヲ
禁制セサル可ラス此政府ノ下ニ居ル人民ハ極ンテ

貧窮ニシテ而モ財ヲ獲ルノ術ヲ得サル者ト極メテ富
テ財ヲ費スノ道ナキ者トノ二類ヨリ成レルモノナリ
勿_レ尼西ニハ一ノ法律アリテ人民ニ謹度ヲ操守セシム
故ヲ以テ此國民ハ儉嗇ノ習其性ト爲テ娼妓ノ如キニ
アラサルヨリハ敢テ貯金ヲ濫費スル者アルナシ何
トナレハ其治術ノ大要全ク工業ヲ維持スルニ在テ穢
褻ノ婦女ハ其金ヲ棄擲スルモ罰ノ以テ之ヲ譴責スル
ナケレハ之ヲ給養スル處ノ人民ハ却テ敝衣惡食ニテ
生涯ヲ送ルモノアリ

希臘ニ於テハ富者ハ祭禮、音樂合奏、闘車競馬ヲ興行シ
或ハ費用ノ大ナル官職ニ就テ蓄積ヲ消費スルノ制度

ナリシヲ以テ富財ノ其身ノ累タルハ猶オ貧窮ノ其身
ヲ苦マシムルニ異ラサリシナリ

第四回 立君政ノ節儉律ヲ論ス

タシトス曰ク曰耳曼ノ一種屬ナルス井ヨ子ス人ハ極
メテ富者ヲ尊敬スルノ風習アリ彼ノ人種ノ一人政治
立ノ下ニ住ムハ職トシテ此理ニ由ルト之ニ據テ之ヲ
見ル時ハ奢侈ノ立君政ニ適應スルハ固ヨリ其理アル
ヲニシテ此政治ニハ決シテ節儉律ヲ設ク可ラス
貧富相同シカラサルハ乃チ立君政固有ノ性質ナルカ
故ニ奢侈ノ一事ハ立君政ニ缺ク可ラサルモノナリ若
シ夫レ財ニ富テモ自由ニ之ヲ消費スルヲ能ハサレハ

貧人ハ生ヲ營ムノ資ヲ得ス饑寒ニ苦シムノ外アラス
且富者ハ帝ニ其財ヲ費ス而已ナラス其費ス處ノ多少
ハ必ス其富ノ相齊シカラサル度數ニ應シ已ニ論セシ
カ如ク其富ノ長スルニ從ツテ奢侈ソ度數モ亦増加セ
サル可ラス之ヲ要スルニ私財増加シテ一人ニ聚マル
所以ハ必ス他人ノ生計ノ爲ノニ需要ナル一部ヲ剝奪
シテ已レカ有トナスニアラサルハ無キヲ以テ聚斂ノ
財ハ之ヲ散シテ原ト之ヲ失フタル處ニ復歸セサル可
ラス

此故ニ立君國ヲ維持スルニハ人品ノ高下ニ應シテ奢
侈ノ度數ヲ増シ益進テ益大ナラシメ勞力者ハ工匠ニ

如カス工匠ハ商賈ニ如カス商賈ヨリ官吏官吏ヨリ貴
族貴族ヨリ貴權ノ大臣遞進累加シテ終ニ君主ニ到ル
ヲ要ス此等差アラサレハ國民ノ衰亡ヲ免レ難シ

羅馬オーストリアス帝ノ治世ニ元老院ノ議員ハ概子方
正端嚴ナル宰官ト民法ニ淹博ナル學士及ヒ國初淳朴
ナル風俗ヲ記憶セル耆老トヨリ成立シカ故ニ痛ク女
子ノ品行及ヒ奢侈ヲ矯正センヲ建議シタルニ帝ハ
詭術ヲ用テ巧ニシテ懇請ヲ避ケシ事デ井オーノ史記
ニ見ヘタリ蓋シ帝ノ當時此議ヲ用ヒサル所以ノモノ
ハ立君政体ヲ建立シテ共和政体ヲ解カント欲スルニ
アレハナリ

テ井ベリユス帝ノ時ニエデ井ール官公エヲ主管元老
院ニ往古ノ節儉律ヲ回復セン事ヲ建議セリ帝固ヨリ
智識ニ乏シカラス然レモ其議ヲ採用セサリキ其言ニ
曰ク今日ノ形勢ニ在テハ須ラク國計民生ノ爲ノニ謀
ラサル可ラス羅馬府民ヲ生養スルニ果シテ外ニ策ア
リヤ藩屬ヲ生養スルニ其術アリヤ夫レ昔日一府ノ住
民タル時ノ如キハ主トシテ儉約ヲ守ルヘキハ當然ナ
リト雖モ今四海ノ富ニ衣食シ其君臣ヲシテ我カ使役
ニ供セシムルノ盛世ニ當テ豈ニ獨リ古制舊法ヲ墨守
シテ可ナランヤト帝ノ言ヲ味ヘハ節儉律ヲ以テ當時
ノ政体ニ適應セサルトノ意見ナリシトハ明カナリ

該帝ノ治世ニ復タ元老院ニ建議スル者アリ曰ク藩鎮
ノ總督タル者皆ナ妻室ヲ攜ヘテ任所ニ赴クアリ之カ
爲ノニ婦人ノ品行ヲ亂クサスト謂フヘカラス宜シク
之ヲ禁止セシムヘシト帝亦之ヲ用ヒス蓋シ昔時ノ清
肅嚴厲ナル氣節ハ今日一變シテ溫和柔優ノ風儀ト爲
リシカ故ニ其品行モ亦之ニ從テ遷移セサル可ラサレ
ハナリ

此故ニ奢侈ハ立君政ニ必須缺ク可ラサルモノニシテ
專制國ニ於テモ亦然ラサルハ無シ唯タ立君政ニ在テ
ハ之ニ依リテ人民其自由權ヲ享用シ專制國ニ於テハ
之ヲ用テ以テ奴隸ヲ虐役スルノ具ト爲ス抑モ奴隸ノ

身ニシテ若シ主人ノ眷寵ヲ得テ自余ノ奴隸ヲ使役スル氏ハ今日享クル處ノ幸福果シテ明日享ク可ヤヲ必シ難キカ故ニ其ノ快樂トスル處ハ唯タ一時ノ驕奢情欲遊蕩ヲ放縱スルノ外他事ナカル可シ

サレハ共和政ハ奢侈ノ爲ノニ滅亡シ立君國ハ窮乏ノ爲ノニ綱紀ヲ亂タストノ思想ヲ生スルハ事理ノ當サニ然ルヘキ所ナリ

第五回 如何ナル時宜ニ於テ節儉律ハ立君政

ニ要用ナルヤヲ論ス

共和政ノ精神ヲ學フニ出テシカ或ハ特殊ノ時態アルニ依リテカ其旨趣知ル可ラスト雖モ千二百年ノ中世

ニ方テアラゴン國

今日ノ西班牙

ニテ節儉律ヲ制定セリ其功

令ニ曰ク君臣ノ別ナク食膳ニ二盤以上ノ菜肉ヲ用ユルヲ許サス手獲ノ鳥獸ヲ除ク外ハ一盤必ス一種ノ調理ナルヲ要スト

瑞典ニ於テハ今日尚オ節儉律ヲ施行セリ然レ氏アラゴン國トハ全ク其旨趣ヲ異ニス

政府ノ旨趣全ク一國ノ經濟上ヨリ節儉律ヲ施行スルヲアル可シ是レ共和政ニ之レヲ設立スルノ旨趣ニシテ今其事蹟ニ就テ見ルニアラゴン國ハ全ク共和政ノ精神ヲ學ヒシヲ疑ナシ

又一國ノ經濟ヲ整理センカ爲ノニ他國ニ對シテ節儉

律ヲ制定スルヲアル可シ譬へハ政府ニテ外邦ヨリ輸入スル物價ノ貴キニ過キルヲ知レハ内國ノ物品ヲ輸出シ其利ヲ以テ外品ニ失スル處ノ損ヲ償フハ必然ノ事ニ属スト雖モ時トシテハ外品ノ輸入ヲ禁制シ人民ヲシテ之ヲ用サラシムルノ利益却テ多キニ居ルヲアリ是レ今日瑞典ニテ節儉律ヲ施行シタル旨趣ナリ斯ノ時勢ニ方テハ立君國ト雖モ節儉律ヲ施行スルヲ以テ治術ノ得タルモノト爲ス

概シテ之ヲ言ハシニ其國益貧ナレハ奢用ノ外物ノ爲ノニ衰微ヲ招クヲ益速カナリ故ニ外國ニ對シテ節儉律ヲ制定スルハ事務ノ緊要ナルモノトナス之ニ反シ

テ若シ其國益富ムキハ奢用ノ外物ニ依テ繁昌ヲ助ケルヲ益居多ナリ故ニ殊ニ意ヲ用テ以テ節儉律ヲ設ケサランヲ要ス固ヨリ此一卷ハ唯一國ノ經濟ニ係ル慶ノ節儉律ヲ舉ルノミニテソノ外國ニ對セル節儉律ニ至テハ第二十卷交易ノ部ニ於テ更ニ詳論スヘシ

第六回 支那ノ奢侈ヲ論ス

或ル政府ニ於テハ特殊ノ理由アルニ依リテ勢ヒ節儉律ヲ施行セサル可ラサルアリ譬へハ其國風土ノ致ス處生齒日ヲ逐テ繁衍シ之カ爲ノニ全國尚農ノ制ヲ立テ老幼專ラカヲ稼穡ノ事ニ竭スニアラサレハ以テ億兆ノ生民ヲ養フ可ラス斯國ニ於テ奢侈ハ甚タ有害ナ

レハ其節儉律ハ益嚴重ナルヲ以テ益其宜シキヲ得ル
モノトス是故ニ政府ニ於テ奢侈ヲ長セシム可キカ將
ク之ヲ抑制ス可キカヲ裁定セント欲セハ先ツ其國人
口ノ多寡ト營生ノ計ヲ得ルノ難易トヲ較計シテ比例
ヲ得ルヲ要ス英國ノ如キハ土壤肥沃ニシテ未耜ヲ執
ル者ト絨氈ノ製造ニ從事スル者トヲ給養シテ餘饒ア
リ此國人タルモノハ玩物ヲ弄シ游技ニ耽リ稍奢侈ニ
流ルハモ太甚シキニアラサレハ敢テ妨ケナシトス佛
國モ亦然リ其禾穀ハ以テ農工ヲ養フニ足ルヘク且内
國ノ玩物ヲ輸出シテ以テ日需ノ要品ニ換ユルノ利ア
リ故ニ奢侈ノ習俗アルモ亦大患トスルニ足ラス

支那ハ否ラス女子ハ概シテ多生ノ質アリ人族ノ蕃殖
スルヤ極メテ快速ニシテ野ニ遺地ナシト雖モ其食ハ
以テ其民ヲ養フニ充分ナラス故ニ此國ニ於テハ奢侈
ハ甚タ民生國計ニ害アリテ勤工儉約ノ精神ヲ振作セ
サル可ラサルハ猶オ共和政ニ於ルニ異ナラス共和政
奢侈ヲ禁ス是レ此國ノ人民ハ必要ノ技術ニ從事シ奢
侈ヲ斥ケ遊樂ヲ遠クルモ勢ヒ已ヲ得サルニ出ル所以
ナリ

爰ニ支那帝ノ明詔ヲ舉テ一班ヲ示サン唐朝ノ成帝曰
ク一夫力ヲ勞セサレハ必ス爲ノニ飢餓ヲ蒙ムルモノ
アリ一婦怠ルハ必ス爲ノニ凍寒ニ苦シムモノアル

可シ是レ我カ祖宗ノ聖訓ナリト此主義ヲ貫徹センカ
爲ノカ特ニ命ヲ下シテ無數ノ佛寺ヲ破毀セリ

第二十一朝ノ第三帝

明ノ永樂
帝ニ當ル

ノ治世ニ鑛山ヲ開テ寶

石ヲ獲テ獻呈スルモノアリ帝乃チ鑛ヲ鎖シテ之ヲ採
ルヲ禁止シテ更ニ勅シテ曰ク朕ハ敢テ飢ヲ療セス寒
ヲ防カサルノ物品ノ爲ニ民カヲ疲ラスヲ欲セサルナ
リト

キヤイウエン帝

未詳

曰ク人民貧ニ迫テ子女ヲ典賣スル

者ノ如キモ尚オ繡文ヲ用テ其鞋ヲ飾ルヲ視タリ奢侈
モ亦タ甚シト謂フ可シ抑モ數人ノ手巧ヲ集メテ以テ
一人ノ衣服ヲ製スル之ヲ看テ數人ノ需要ニ供給シテ

防寒ノ預計ヲ得シモノト爲ス可キカ又十口ニシテ一
農ノ鋤頭ニ出タル果實ヲ食フ之ヲ以テ人民ノ口腹ヲ
扶持スルノ策ト稱ス可キカ

第七回

支那

ニテ奢侈ヨリ生スル處ノ禍害ヲ

論ス

支那史ヲ歴覽スルニ建國ヨリ今日ニ至ル迄朝代ノ鼎
革ヲ經シ事已ニ二十有二及ビ而シテ一朝ノ興敗ア
ル毎ニ必ス一國ノ大顛覆アリ其間ニ亦タ數回ノ内亂
アルヲ免レス國初ノ三代ハ政治休明ニシテ加フルニ
後世ノ如ク版圖甚タ廣大ナラサルヲ以テ治國ノ歷數
寂モ長久ナリ固ヨリ後世ノ諸朝ト雖モ創業ノ初ハ皆

ナ隆盛ノ治化ヲ布カサルハ無ク懿德、謹慎、明察ヲ以テ
帝王ノ缺ク可ラサル資格ト爲シテ之ヲ具フレバ季世
ニ至テ之ヲ荒怠セサルハ無シ蓋シ創業ノ君ハ親ヲ擲
風沐雨ノ勞苦ヲ閱歷シ殊ニ前朝ノ君主淫樂ニ耽リテ
國ヲ失フタル殷監遠ラス目聵ニ在ルカ故ニ懿德ノ國
ノ爲ノニ利益アルヲ知テ怠ラス淫樂ヲ恐ル、猶ホ蛇
蝎ニ於ルカ如キモ三世四世ニ至テハ祖宗創業ノ艱難
ヲ忘レ放蕩奢侈遂ニ帝王ノ常トナリ日夜宮中ニ宴遊
シテ自ラ聰明ヲ削リ自ラ天壽ヲ縮メ外ニシテハ大臣
專ラ大權ヲ弄シ内ニシテハ閹官寵ヲ恃テ政務ニ參預
シ幼冲ノ君ニアラサレハ寶祚ヲ踐マシノス上意下達

セス民情壅閉シ游食ノ徒ハ國中ヲ往來シテ人民ノ工
業ヲ妨害ス此機ニ乘シテ英雄豪傑崛起シ其君ヲ弑シ
或ハ之ヲ廢シテ其社稷ヲ奪フ而シテ此篡奪ノ首魁タル
モノ親ラ國祖ト爲リテ大業ヲ傳紹シ而シテ曾玄ノ世ニ
至レハ復タ淫酒ニ沈湎シ毫モ前朝ノ季世ニ異ナラス
斯ク興亡治亂循環シテ止マサルナリ

第八回 人民ノ節操ヲ論ス

抑モ女子ノ失德ヨリ生スル處ノ弊害ハ一端ニシテ足
ラス苟モ此大綱タル守防節操一タヒ弛縦スレハ人心忽
チ敗壞シテ救フ可ラス其禍更ニ之ヨリ大ナルハ莫シ
故ニ民主ノ邦ニ在テハ貞節ノ道地ニ墜ルヲ看テ亡國

ノ厄運ト做シ之ヲ以テ政府顛覆ノ前兆ト爲シテ可ナ

リ
是レ賢明ナル制法者カ共和政ノ爲メニ法律ヲ制定ス
ルニ方テ三タヒ意ヲ致シテ以テ女子ノ風儀ヲ方正端肅
ナラシメシ所以ニシテ其法律ハ猥褻ノ言行ヲ抑絶セ
シノミナラス併セテ其影響ノ及フ所ヲ防制シ而シテ男
女相交ルノ際諂媚諛悅ノトニ涉ルヲ痛禁セリ蓋シ交
際ニ諂媚アルハ懶惰ノ胚胎スル本ニシテ直チニ女子
ノ貞操ヲ破ルニ至ラスト雖モ男子ノ性情ヲ柔弱ニシ
終ニハ遊藝ニ耽リ玩物ニ癖シテ日常有用ノ事件ヲ賤
視スルニ至ルナリ之ヲ要スルニ男女交際盛ナルキハ

女子ノ長技タル巧言令色ニ惑溺シテ人民ハ其操守ヲ
固持シ難シ

第九回 政体異ナレハ女子ノ分限亦全シカラ

サルヲ論ヌ

立君政ハ爵位品階アリテ女子ト雖モ宮庭ニ伺候ス故
ニ其身ヲ檢束スルヲ自ラ少ナク且ツ日ニ士大夫ニ交
ルヲ以テ此時ニ限リテ自由ノ氣象アリ是ヲ以テ名利
ニ走ルノ縉紳ハ之ニ藉テ以テ富貴ヲ希圖スルノ方便
ト爲ス而シテ女子ハ其體質俱ニ柔弱ニシテ傲氣ニ堪
ハス唯タ虚飾ノミヲ好ムモノナルカ故ニ奢侈ハ常ニ
女子ヲ追蹤シテ流行ス

專制政ニ於テハ女子ニ由テ奢侈ヲ招クヲナシ此國ニ
テ女子ハ常ニ男子ノ奴隸ト爲リ其状恰モ男子ノ爲ノ
ニ奢侈ノ一物ニ属スルモノ、如シ夫レ一國ノ人民ハ
各其政体ノ主義ニ率由シ外間ニ流行セル風俗ヲ採リ
テ之ヲ一家ニ施用スルモノナレハ法律嚴酷ニシテ罪
責立トコロニ至ル處ノ此政体ニ於テ女子ニ自主權ヲ
與フレハ終ニ自ラ危險ニ陥ルヲ免レサルヲ恐レテ故
ラニ之ヲ檢束セサルヲ得ス專制政ニ於テ女子ノ爭論
不慎、恨惡、媚嫉、妒忌及ヒ彼ノ局促ノ心魂女子ヲ以テ勇健
ナル氣魄男子ヲ感化スルカ如キ狡黠ナル術數ハ極ノテ
重大ナル禍害ヲ胎胎スル端緒トナルナリ

加之此國ニテ君主ハ人類ヲ以テ遊戲ノ一具ト爲シ一
人ニシテ衆多ノ妾媵ヲ擁シ得ルカ故ニ婦女ヲ幽閉シ
テ其自主ヲ束縛スルカ如キ情實アルハ實ニ枚擧ニ遑
アラス

共和政ニ於テハ法律ニ依テ女子ニ自由權ヲ付與シ風
俗ニ依テ之カ品行ヲ檢束ス而シテ奢侈ヲ擯斥シ從テ
醜汚邪僻ノヲハ之ヲ容ル、ノ地無カラシム

希臘ノ諸邦ニ於テハ曾テ品行端正ヲ以テ男子ノ德ト
爲スノ教制アルヲ無ク人民ハ唯タソノ情慾之レ縱ニ
シテ毫モ檢束スルモノアラス而ノ男女相親シミ相愛
スルノ事ハ吾人ノ言フニ忍ビサルノ狀態ヨリ成リ淫

奔和姦ノ流婚姻ノ輕易ナルハ猶ホ朋友ノ交際爲スニ
行スルヲ云婚姻ノ輕易ナルハ猶ホ朋友ノ交際爲スニ
異ナラス男子品行斯ノ如ク疎放ナリト雖モ女子ハ皆
ナ貞淑ニシテ德行アリ此ノ一事ニ就テハ希臘ノ治法
誠ニ巧妙ニシテ其他ノ國民ノ敢テ企テ及フ處ニアラ
ス雅典ニハ特設ノ宰官アリ
テ女子ノ品行ヲ監視セリ

第十回 羅馬人ニ家内裁判ノ法アリシヲ論

羅馬ニ監察官ノ設置アリト雖モ希臘ノ如ク之ヲシテ
女子ノ品行ヲ監察セシムルカ爲ノニアラス唯タ男女
ノ別ナク共和一体ノ人民ヲ督視スルニ止マルカ故ニ
羅馬人ハ家内裁判ノ制度ヲ設テ以テ希臘監察官ノ職

掌ヲ執行セシメタリ
有用ナル事ヲ記載シ女子及ヒ少年ノ品行心術ヲ敗類
セシヲタル徒黨ヲ糾弾シ之ヲ罪スルニ共和政ニ對シ
テ反亂ヲ企ツル
モト爲セリ
其法夫タル者ハ妻ノ親戚ヲ召集其面前ニテ妻ノ罪ヲ
審斷セリ
獨リ夫ニ屬セリ然レ其親戚ヲ召集シ而ノ判斷ノ權ハ
ハ親戚中五名ノ同意ヲ得テ判斷セリ
此裁判法アル
ニ依テ人民ノ風俗ヲ維持シ又風俗ノ作用ニ仗テ此裁
判法ヲ維持セリ此裁判所ハ違法ノ罪ヲ判定セシノミ
ナラス風俗ノ邪正ヲモ糾審セシ故ニ他人ノ品行ノ道
義ニ背クト否トヲ判定スルニハ必ス先ッ已レノ品行
ノ端正ナルヲ要セリ

此裁判ニテ擬定スル罰科ハ機ニ應シテ輕重アルヲ要セリ是レ實際ノ情勢然ルヘカラサルヲ得サレハナリ蓋シ品行心術ニ關リタル規律ハ之カ條例ヲ立テ之ヲ法典ニ掲ケ能ハス殊ニ法律ノ作用ニ依リテ以テ吾人ノ他人ニ對シテ盡ス可キ義務ヲ整正スルハ容易ナレモ自己ニ對シテ操守ス可キモノヲ劃定スルハ其タ難事ナルヲ以テナリ

家内裁判ノ彈劾ヲ蒙ムル上更ニ人民全体ノ譴責ヲ免ル可ヲサル一罪アリ犯姦是レナリ當時犯姦ヲ以テ公罪ト定メシ所以ハ蓋シ共和政ニ於テ品行ノ端正トラサルハ政體ノ隆污ニ關スルモノ少カラサルニ由ルカ

或ハ妻女ノ失德ハ竟ニ其夫ニ累及シテ齊シク失行ノ嫌疑ヲ免レサルニ由ルカ然カラサレハ正直ノ人民ト雖モ其妻ノ罪ヲ隱シテ刑典ヲ免脱セシムルノ患アルニ由ルモノカ其基原ハ得テ知ル可ヲサルナリ

第十一回 羅馬ノ制度其政體ト俱ニ變革セシ景況ヲ論ス

家内裁判法アリ以テ人民ノ品行ヲ維持シ更ニ又人民全体ノ糾彈法アリ以テ之ヲ檢束セリ故ニ人民ノ品行衰頹セルニ及テ家内裁判法及人民ニテ糾彈ヲ行フノ二事俱ニ其作用ヲ失シ從テ共和政モ滅亡ニ就ケリ恒立ノ審問法即チ總督ノ中ニ司法權ヲ分課シ且ツ總

督ニテ漸ク一切ノ案件ヲ判斷セル制度ヲ立ルニ依リ
テ家内裁判ノ職務ヲ侵蝕シタリ史家ハチベリユース
帝カ此法院ヲシテ訟獄判斷セシメタルヲ見テ奇異ノ
事トシテ即チ往古ノ訴答法ヲ回復セリト評論セリ
立君ノ政体ト爲リテ風俗一變シ人民全体ノ紀彈法モ
又地ニ墜タリ其原因ヲ尋レハ或ハ良心ニ昧キ徒アリ
テ女子ニ賤蔑セラレタルヲ憤ホリソノ已意ニ從ハサ
ルヲ怨ミ或ハ操守凜乎トシテ犯ス可ラサルニ耻テ却
テ奸謀ヲ運ラシ女子ヲ枉害スルノ患無キヲ保チ難キ
ニ出タルナリ又ジュリヤン帝ノ法律ニ凡ソ女子ノ犯
姦ヲ告發スルニハ必ス本夫タルモノニテ妻ノ醜行ヲ

縱容シタル確証ヲ得サレハ之ヲ採用セサルト制定
セリ此新律ニ依テ大ニ人民ノ紀彈法ヲ局促シ其實恰
モ之廢止ヒシニ異ナラス孔士且帝ニ至テ全ク人民ノ
此法相存スルキハ他人ノ言ヲ以テ已定ノ
婚姻ヲモ妨ク可キ蓋汚ノ事アルヘシト
シキストス、ク井ントス帝ハ人民ノ紀彈法ヲ回復セン
ト欲シタリ夫シキストス、ク井ントス帝命ヲ下シテ若シ
テハ死ヲ以然レ氏時世遷移シテ已ニ立君政ト爲リシ
カ故ニ此法ノ流俗ニ適當セサルハ辨論ヲ俟タスシテ
明瞭ナリ

第十二回

羅馬人ノ女子主管者ノ法ヲ論ス
羅馬ニテ女子其夫ト行事ヲ全クシ且ツ其准許ヲ經ル

ニアラサレハ始終主管ノ下ニ在テ自立獨行スルヲ得サリキ其主管タルモノハ戚族ノ中ニテ家モ親近ナル男子ヲ以テシ其制限ノ如キハ甚タ嚴格ナリト見ヘタリ此法共和政ニ在テハ甚タ適當ナルヘケレ氏立君政ニ在テハ必須ノモノニアラス又昔時曰耳曼人種ノ女子ニモ全シク主管アリテ畢生自主權ヲ得セシノサルハ夷俗ノ法律中ニ散見セリ但シ此人民ハ立君政ヲ建置セシ後ニモ尚オ此風俗ヲ存セシカ氏久シカラスシテ遂ニ廢絶シタリ

第十三回 女子ノ失操ヲ罰センカ爲ノニ諸帝制定ノ功令ヲ論ス

ジュリヤン帝ノ法律中ニ犯姦ノ刑ヲ載セタリ然レ氏此法律ハ其後同様ノ旨趣ヲ以テ制定シタル者モ固ヨヨリ品行ノ端正ナルヲ表スルニ足ラス適マ以テソノ品行ノ敗類セルヲ證明スルニ過キサルノミ其ノ立君國ト爲ルニ及テヤ女子ノ治法全ク一變シ品行清純ノ議論ハ已ニ去リテ唯タ失行懲罰ノ事ノミト爲レリス之ヲ罰スルカ爲ノニ新法ヲ制定セシハ蓋シ犯姦ノ如キ國事ニ關係セサルモノハ之ヲ縱容シテ不問ニ置キシニ由リシナル可シ淫蕩邪褻ノ風益熾ニ其害恐ル可キニ至テ諸帝ハ已ムヲ得ス法律ヲ制定シ以テ其醜行ヲ禁絶センヲ企タ

リ然レ其旨趣固ヨリ一國ノ風俗ヲ改良スルニ在ラ
ス何トナレハ其律文ハ一國ノ改良ヲ主トスルカ如ク
見ユレ氏史家ノ論說ニ據テ當時ノ事實ニ徴スルニ一
時ノ禁制ニ止マルハ實ニ掩フ可カラサレハナリダ井
ヨ一ノ史ニオ一グストス帝カ此一事ニ關係セシ治圖
ト及ヒソノ總督監察ノ憲職ニ在リシ時ニ巧ミニ口實
ヲ設ケテ之カ改良ヲ謀ルノ建議ヲ廻避シタルノ模様
ヲ詳記セリ帝在職ノ際一件ノ獄案アリ即チ一少年曾
シタルモノナリ帝通セシ婦人ト婚姻ヲ結ビシヲ告訴
又敢テ之ヲ罰セシ躊躇久クシテ正義ト發言シテ忘却ニ付
戲ノ一事實ニ此罪ノ原因タレリ宜シク之ヲ忘却ニ付
ス可シト其人ヲ釋シテ問ハサリキダ井ヨ一ノ第四卷
ツ

元老院ヨリ女子ノ品行ヲ整肅スヘキ禁令制定ノ奏議
ヲ上呈セリ帝其議ヲ止メシカ爲メ乃チ諭シテ卿等其
妻妾ヲ警戒セント欲セハ宜シク朕カ妃嬪ヲ待遇スル
カ如クス躬行如何
過スルノ躬行如何
ヲ問ント請ヘリ

羅馬ノ史紀ヲ閱スレハオ一グストス帝及ヒチベルユ
ス帝ノ治世ニ間々女子ノ淫行ヲ責罰シタル斷案ナキ
ニアラス然レ氏之ニ由テ其精神ノ所在ヲ察スレハ以
テ當時ノ風俗人心澆漓ヲ觀ルニ足ルモノアリ
二帝ノ旨趣ハ專ラ其戚屬ノ放蕩ヲ責罰スルニ在レ氏
ソノ之ヲ責罰セシ旨趣ハ品行邪猥ノ点ニ在ラスシテ
躬ラ羅織セシ不敬大逆等ノ罪ニ在リテ只帝威ノ尊
嚴ヲ増シ睚眦ノ私仇ヲ報復スルヲ以テ目的ト爲セリ

故ニ羅馬ノ史家ハ口ヲ極メテ其暴政タルヲ罵レリ

ジュリヤン帝ノ刑法ハ頗ル輕クシテ其罪ヲ懲ラスニ足ラサルヲ以テ此法ハ羅馬ノ律例彙解ニ出レ其刑速ニ追放シヨリゲニ止マルヲ見レハ此刑諸帝ハ法官ノ斷案ヲ定ムルニ臨テ刑典ヲ増ス事ヲ准許セリ是レ乃チ諸史家ノ物議ヲ招キシ所以ナリ蓋シ刑典ヲ預定スルナク法官ノ出入ニ任スル片ハ之ヲ實施スルニ方テ該女子果シテ其刑典ニ當ル可キ乎否ヤヲ審理セス唯タ其法則ヲ犯スヤ否ヤヲ問フ而已ナレハナリ
チベユス帝ノ治世中暴虐ノ惡名ヲ下スヘキハ古法ヲ濫用シタルノ一事ナリ帝ハジュリヤンノ刑法ノ範圍

ヲ超テ女子ヲ責罰センカ爲メニ特ニ家内裁判法ヲ復立セリ

コノ女子ノ規律ハ當ニ之ヲ元老議官ノ家族ニノミ用井テ庶民ニ施サ、リキ蓋シ當時女子ノ醜行熾ニシテ之ヲ多ク貴顯ノ家ニ見ルヘキヲ以テ特ニ之ニ由テ貴顯ヲ彈劾スルノ辭柄ト爲セリ
既ニ論セシカ如ク品行ノ端正ヲ要スルハ必竟立君政ノ主義ニアラサルヲハ羅馬國初諸帝ノ世ニ於ル實蹟確徵ヲ以テ證スルニ足レリ然レ氏尚オ茲ニ疑ヒアラハタシトス、スエトニユス、ジュウエナル或ハマルシヤルノ諸書ヲ熟讀スヘシ

第十四回 羅馬人ノ節儉律ヲ論ス

奢侈ハ失操ニ從ヒ失操ハ奢侈ニ伴ヒ二者常ニ相離レ
スシテ人民一般ノ品行ヲ敗壞スルノ大害ヲ論述セリ
夫レ人民一タヒ心思ノ檢束ヲ怠リテ運行ノ自由ニ任
スルハ其邪惡界ニ陷ルヲ防キ難キヤ必然ナリ
羅馬ニハ監察官アリテ常ニ宰官ヲ申飭シテ國制ノ外
ニ特別ノ規律ヲ制定シテ以テ女子ノ節儉ヲ保持セシ
メタリフハニユス（按羅馬ノ統領ニシテ人民其分限リ
シニユス有セル田地ニ制限ヲ立テタリ所オピユス
馬ノ大法官ニテ女子ノ服ヲ立テタリ所オピユス
飾ノ華美ナルヲ制禁セリ諸賢法律ヲ制定セシモ全
ク之レニ外ナラサリキ曾テ女子群起シテオピユスノ

法禁ヲ解カンヲ強請シ大ニ元老院ヲ開動セシハ

李維ノ史記ニ詳カナリウハレリユス、マキシノユムハ
此法律ヲ廢止セシ月日ヲ以テ乃チ羅馬人カ奢侈ノ惡
風ニ沈淪セシヲ計ルノ期限ト認メタリ

第十五回 政体相異ナルニ從テ女子ノ嫁資及

ヒ其結婚ニ由リテ得ヘキ利分ニ不
全アルヲ論ス

立君國ニ於テハ夫タルモノヲシテ爵位ヲ保チ奢侈ヲ
享用セシノンカ爲メニ妻女ノ嫁資豐饒ナラサルヲ得
サレ氏節儉ヲ旨トスル共和政ニ於テハ嫁資ニ一定ノ
制限アラシト要ス（當時マルセイユ以テ共和政中
ノ至美ナルモノトセシハ其嫁資

金貨ニテ一百コロオン衣服ニテ五
襲ニ過キル事ヲ許サ、ルヲ以テナリ 專制政ハ女子ヲ奴
隸視スルヲ以テ嫁資ヲ資ラス等ノ一ハ稀ニ見ル所ナ
リ

佛國ノ法律ハ夫婦ニテ財産ヲ共有スルモノト制定シ
タリ此法アルカ故ニ女子能ク家事ニ周旋シテ自ラ止
ム能ハサル情實ヲ致セリ極ノテ善ク立君ノ政体ニ適
應スト謂フ可シ共和政ニ於テハ婦徳ナルモノアルカ
故ニ立君政ニ於ルカ如ク緊要ナリトセス專制國ニ於
テハ妻女ヲ以テ即チ夫ノ所有セル財産ノ一部ト看做
スハ其常ナルカ故ニ此政体ニハ夫婦ノ財産ヲ共有ス
ル法ヲ立ルハ愚ノ至リナリ

抑モ女子ハ男子ヲ誘掖シテ婚姻ノ情願ヲ發セシムル
ニ足ル可キ地歩ヲ占ムルカ故ニ法律ニ於テ夫ノ財産
ニ依テ一定ノ利分ヲ得セシムルモ敢テ公衆ノ利益ヲ
損スルモノニアラス然レモ富ハ奢侈ノ原ト爲ルヲ以
テ共和政ニ於テハ甚タ其弊アルヲ免レス專制國ニ在
テハ婚姻ニ由テ所得ノ利分ハ營生ノ需用ヲ充スノミ
ニ限ルヲ要ス

第十六回

サムナイト人ノ風俗ヲ論ス

サムナイト人ノ風俗ハ區域狹小ナル共和政ノ地位ニ
應シテ懿美ナル効果ヲ結フ可シ國中ノ少年擧テ一地
ニ集會シテ互ニ其躬行ノ邪正ヲ審驗シ倘シ衆中ニテ

品行第一ノ褒賞ヲ得タルモノアレハ乃チ其意ニ中タル女子ヲ撰テ其妻ト爲ス事ヲ許シ品行第二ニ居ル者之ニ續テ配偶ヲ撰ミ以下品行ノ順ヲ逐フテ各自ニ撰擇ヲ爲ス此時ニ方テ少年ノ情願ヲ達セシムヘキ資格ハ徳ノ一物ト國ニ竭シタル功勞トニ在リ故ニ資格ニ寡モ富ム者ハ國中ニテ第一等ノ婦女ヲ撰ミテ配偶ト爲スヲ得テ妻女ノ愛敬、美容、貞節、閨閤ヨリ嫁奩ノ豊富ナルニ至ル迄一モ徳ノ一物ヲ以テ之ヲ購ハサルハ無シ實ニ小國ノ財政ヲ煩ハサスシテ貴重ノ報酬ヲ爲シ而シテ又タ男女ノ品行ヲ激勵ス其利益ノ巨大ナル意想ノ得テ測ル處ニアラス

第十七回 女王ノ治國ヲ論ス

埃及ノ風俗ノ如ク女子ニシテ一家ノ政ヲ管理スルハ物理人情ニ背戾スト雖モ女主ニシテ一國ニ君臨スルハ其理自ラ別ナリ抑モ女子ノ身ヲ以テ一家ヲ治ムルニ足ルハ其質脆弱ニシテ以テ男子ノ強悍ヲ統御スルニ足ラスト雖モ一國ニ君臨スルニ方テハ其脆弱ナル氣質即チ政府ノ良資タル仁慈淑均ト爲テ其効迥カニ粗厲強愎ノ上ニ出ルナリ

印度ノ人民ハ寡モ女主ノ政治ニ悅服ス故ニ彼國ノ憲法ハ王室ニ男子ノ出アレハ之ヲ立ツヘシト雖モ若シ其母王族ノ出ニアラサレハ則チ別ニ王族ニ出タル母

ノ女子ヲ冊立シ而ノ定負ノ官吏ヲ置キテ政機ヲ輔弼
シ以テ其責任ヲ分任スミットノ説ニ據レハ亞弗利
加ノ諸國ニ於テモ然ラサルハ無シ若シ之ニ英魯二國
ノ憲典按當時二國ノ憲法ニテ加フル時ハ以テ女主臨
女主嗣位ノ制アリ國ノ制度ノ定憲英魯二國ノ制專制魯ノ二政ニ適應スルヲ看出ス
ナラン

萬法精理卷之七終

明治八年十一月廿八日版權免許

繙譯並出版人 何 禮之

東京富士見町四丁目十一番地

馬喰町二丁目

芝太神宮前三島町

島村利助

日本橋通三丁目

山中市兵衛

南傳馬町二丁目

丸家善七

穴山篤太郎

發兌
書林